The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	懷德堂要覧
Author(s)	懷德堂記念會
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90229
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

懷德堂要覽

御沙汰書

財團法人懷德堂記念會

今般其ノ會ニ於テ
懷德堂教育ノ感化ヲ追念シ
道德學術ノ發達ヲ圖ラムトスル計畫有之候趣ニ付
思召ヲ以テ金貳百圓下賜候
事

大正三年三月五日

宮內省

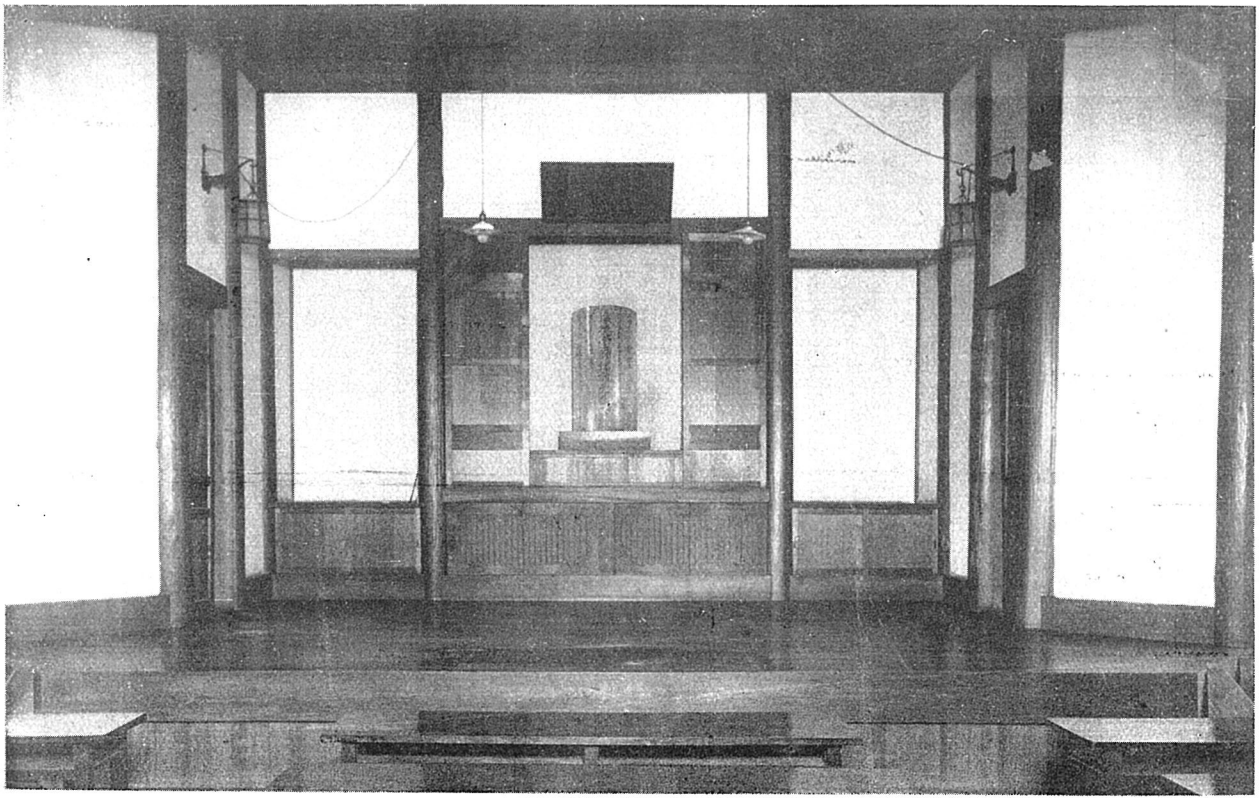
財團法人懷德堂記念會

其會事業ノ狀況ヲ
被聞食
思召ヲ以テ金參千圓
下賜候事

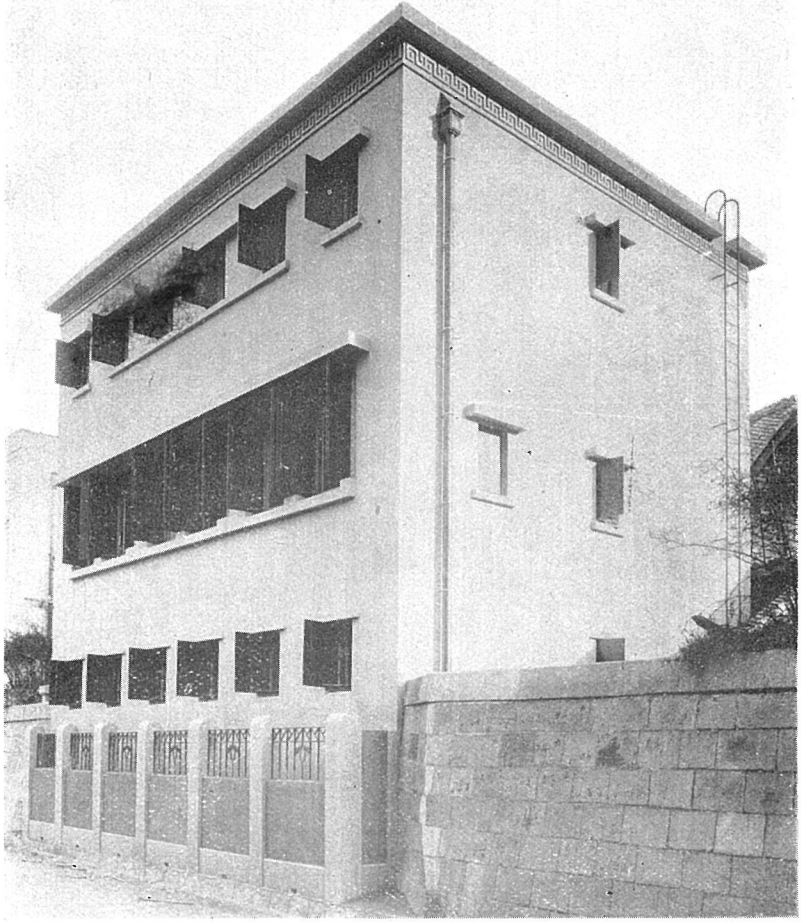
大正十二年七月二十七日

宮內省

懷德堂正門



懷德堂講堂



懷德堂文庫北側

懷德堂要覽目次

(一) 沿革

一、舊懷德堂略史……一

二、新懷德堂沿革略……一二

附、年譜

(二) 職制……二三

(三) 規則、規定

一、懷德堂講義講演規則……二四

二、素讀科規則……二五

三、懷德堂通俗講演規定……二六

四、懷德堂文庫閱覽規則……二六

五、懷德堂漢學獎勵規定并同給與規定……二七

六、懷德堂記念會會計規則……三二

七、懷德堂記念會奉祀規定……三五

(四) 事業

一、講義

イ、定日講義……三五

ロ、日曜朝講……三六

ハ、文科講義……三七

二、講演

イ、定期講演……三八

ロ、通俗講演……四一

三、素讀……四七

四、恒祭幷記念講演……四七

五、孔子祭幷記念講演……四九

六、出版……五〇

七、講習……五一

八、奬學……五一

九、文庫公開……五二

(五) 學年暦……五二

（六）顧問及職員講師……五三
（七）聽講者諸統計
一、講義講演聽講者及素讀生延人員數表……五四
二、定日講義聽講生出席數統計表……五五
三、定日講義聽講生職業別統計表……五七
四、定日講義聽講生地方別統計表……六〇
五、日曜朝講聽講者數統計表……六四
六、文科講義聽講生出席數統計表……六五
七、文科講義聽講生職業別統計表……六六
八、文科講義聽講生地方別統計表……六八
九、定期講演聽講者數幷職業別統計表……六九
一〇、定期講演聽講者地方別統計表……七四
二、通俗講演聽講者數表……七九
三、定日講義聽講生全數……七九
三、文科講義聽講生全數……八〇
（八）文庫藏書冊數……八〇

(九) 三年以上聽講繼續者及素讀修了者……八一
(一〇) 財團法人懷德堂記念會役員……八四
(一一) 財團法人懷德堂記念會財產……八五
(一二) 財團法人懷德堂記念會寄附者諸彥芳名并寄附金額……八七
(一三) 懷德堂并文庫平面圖　附建築工事概要……九一
附錄
堂友會　附堂及會趣旨及同會則……一〇〇

懷德堂要覽

（一）沿革

一、舊懷德堂略史（西村時彥懷德堂考抄錄）

大阪は古來商業の都會なれども、學問の開けしも亦久しく、町人文學の盛なる海內其比を見ず。和漢學は言ふも更なり、院本、小說、俳諧、狂歌に至るまで其門頗る多く、各特色ありて、其勢力も亦侮るべからず。今漢文學研究の方面を觀察するに、我が懷德堂を以て經と爲し、混沌社を以て緯と爲し、伊物崎其他の各派其間に襯映すと見るを得べきか。混沌社其他に關しては姑く言はず、懷德堂は實に享保十一年に創まり、明治維新の際に一時廢絕し、時に隆替を免れずと雖も、大阪の文敎を主持すること實に一百數十年、久しからずとせず。石菴、甃菴に始まりて、竹山、履軒に盛んに、其學派の分布せる其勢力の盛なる昌平黌に繼げり。創學の年月に於いて懷德堂より早きもの、長崎に立山書院あり、岡山に閑谷黌あり、幕府に昌平黌あり、肥前に東原庠舍ありと雖も、懷德堂が商業地の大阪に起

りて、久しきに亘りて、以て民彝人道を講明せしは尤も誇るべき事實にあらずや。

懷德堂の創始を原ぬるに、其前身に多松堂あり。中井甃菴が三宅石菴へ入門せしより、甃菴同門の三星屋武右衛門、道明寺屋吉左衛門、舟橋屋四郎左衛門等と謀り、醵金して今の安土町二丁目北側に宅を買ひて石菴を住ませ、多松堂と名けて講會の處となせり。これ正德三年の事なるが、數年の後、石菴强いて高麗橋三丁目なる亭屋三郎右衛門の隱居屋敷に借宅せるより、享保四年多松堂も賣拂はれしが、此頃より備前屋吉兵衛、鴻池又四郎なども入門し、從游の徒も次第に加はれり。會々大火に遭ひて石菴平野に立退きしより、前記の武右衛門（中村睦峰）吉左衛門（富永芳春）四郎左衛門（長崎克之）吉兵衛（吉田盈枝）又四郎（山中宗古）の所謂る五有志は諸同志と謀つて、災後の地を尼ヶ崎町一丁目（今橋四丁目）北側なる吉左衛門隱宅に卜し、又も此に講舍を建てたり。是れ實に享保九年五月の事にして、表口六間半、奥行二十間なりし、名けて懷德堂といひしは論語里仁第四の君子懷ㇾ德の語に取れり。十一月石菴の平野より歸りて此に住し。以て子弟に敎授せむことを請へり。

時の將軍は八代吉宗公なりしが、嘗て近臣に向て、京大阪にも學問所樣の處拵へ置き、忠孝の筋說き聞せたきもの、誰か願出づる者あるまじきやとの物語ありしを、大島近江守殿より歸宅して父の古心に物語り、古心より入魂の三輪執齋に心當はなきやと問ひしが、大阪には三宅石菴あり、人其德に服すれど左樣の儀願出づべきや心元なしとて、右の趣を執齋より豫て相識の門人甃菴に文通せり。

甃菴報を得て諸同志と謀りしに、若し官許を得ば、只今建立の懷德堂も長く退轉の憂なく、老師石菴の遺跡も永遠に傳はるべく、本望の至と衆議一決しけるが、今之を老師に告げなば恐らくは許可なからん、暫く之を秘すべしと爲し、甃菴專ら事に當りて江戸大阪の間を奔走し、其筋の注意もありて遂に願書は大阪にて差出すことゝなりしが、やがて町奉行より甃菴へ、願意聞屆けられ、學校地は諸役を免せらるゝをもて、學問所を取立て、長く退轉せざる樣に勸めよと申渡されしは十一年七月にて、幕府の官學昌平校の創立元祿三年を去る三十七年後なり。斯くて更に當時の懷德堂の東隣なる尼崎屋の持地表口五間、裏行二十間を申立てゝ、此も許され、直に普請に取掛り同年八月には落成せり。此に至りて校堂の外に左右寮舍ありて、規模頗る大なり。普請の費用は五同志以下の義金による。然れば懷德堂は最初よりして敷地は恩賜、維持は義金といふ一種公立の性質なりけり。衆石菴を推して學主となし、甃菴を推して學問所預人とせり。石菴は以前より學校住居なりしが、以後甃菴も堂內住居となれり。

學問所の普請は八月に成就せしが、石菴始めて論語の講席を開きしは十月五日なりき。五井蘭洲聘せられて助教となり日講を主れり。並河誠所、井上赤水も一時講を助けたりしが、誠所は享保十二年の四月を以て東に歸り、尋いて蘭洲も亦東游の途に上れり。然れば石菴も享保十二年の夏頃より日講を手傳ひけるが、十三年の春に止みたれば、井上赤水一人となりしより、隔日の講となし、從來主と

して學校の事務を管理せし甃菴も專ら講說に從事しけり。三輪執齋は石菴の親友にして懷德堂創立の張本なり。然れば京都より大阪に來りし時には臨時の講あり。石菴沒後、伊藤東涯をも招請して講筵を開けりといふ。

石菴が享保十一年十月、懷德堂の玄關に懸けし壁書三ヶ條は平民的敎育に重きを置けると、大阪町人の事情を參酌せる点に於て用意せられたるが、其文に

定

一、學問は忠孝を盡し職業を勤むる等之上に有之事にて候、講釋も唯右之趣を說すゝむる義に候へば書物不レ持人も聽聞くるしかるまじく候事

但不レ叶用事出來候はゞ、講釋半にも退出可レ有レ之候

一、武家方は可レ爲二上座一事

但講釋始り候後出席候はゞ、其差別有之まじく候

一、始て出席之方は、中井忠藏(甃菴を)(いふ)迄其斷可レ有レ之候事

但し忠藏他行之節者、支配人道明寺新助迄案內可有レ之候

以上

午十月

學問所行司

とあり。而して創學當初の教科に關しては懷德堂內事記は

一、日講の書は、四書、書經、詩經、春秋胡傳、小學、近思錄

一、毎月望、同志會合、老先生象山集要之講、右者毎年正月十五日初會にて、同志中燕集、老先生初講有レ之、後有レ故毎月之會は十六日に改む、

とあり、これによれば日講の書は皆是れ程朱の學なれども、石菴が正月初講及び毎月の講釋は陸子の學なり。要するに最初の懷德堂は實に朱陸併用なり、外朱內王なり、四書、五經、及び道義の書以外の雜書、或は表面詩文を講ずる事をも定約によりて禁じたりしが如し。

石菴は懷德堂創立後、僅に四五年なる享保十五年七月を以て病歿せり。石菴の歿後、甃菴懷德堂の學主となりて、學問所預人の名義をも兼ねたりき。甃菴は實に懷德堂創立の功臣なり。創學願立の爲に徒步にて江戸に往復すること前後六回、中間江戸にて大患に罹りしも屈せず、遂に其志を達せり。且石菴の高足として學德並に長じたる者甃菴に若くはなし。志尙同じからざる學者を聘せんよりも、甃菴をして石菴の後を承けしめしは情理に於て當然なり。以後中井三宅の二家は其宅を入易へて住めり。初め石菴甃菴並に堂中に住せし比は、皆客分の姿にて、普請造作賄方までも一切五同志にて引受けしが、甃菴の代となりて、世話人大に減じ、萬事舊の如くならざるより、甃菴は殘れる五同志の富永芳春、吉田盈枝、山中宗古の三人と協議し、學校の事一切を甃菴一人にて引受ける事とせり。是に

至りて懷德堂維持の制度は一變せり。

既にして創學二十餘年を閱し、堂舍も頽圮して、支へ難きより、甃菴奮然として新築を思ひ立ち、大工共に向ひて、學校資金の餘裕を待つて工事を興さんには、我等存命覺束なし、先づ普請を成就せしめ、後五年を期限として追々に支拂ばやといひしに、甃菴の人格に服せる事とて、衆工爭ふて役に就き、學校は後世の模範なり、堅固に造作せんこと、我等の面目なり、賃銀は問ふ所に非ずと、手を揃へて夜を日に繼ぎ、僅々十餘人の大工にて、寶曆元年の正月に始り、六月には普請出來し、人皆其神速に驚きしといふ。甃菴時に年六十なり。是に於て堂舍一新して煥然觀を改めたり。而して節省儉約よく工費數百金を期限の如く償へり。此の大土木の成就せしは鴻池又四郎の如き篤志の尠からぬ寄附を爲せるにもよるが、甃菴の堅節と材幹無んば焉ぞかゝるを得ん。甃菴の大阪の文敎を裨益せし功德決して忘るべからざるなり。甃菴の德性を重んじ踐履を尙びしこと此の如し。而して著述は其好む所に非ず、寶曆八年六月歿す。二男あり、長は竹山、次は即ち履軒なり。

甃菴歿後の學主は當代の耆宿なる蘭洲を持すべきこと當然なり。懷德堂創立の初め、講師を求むるに當りて、甃菴は蘭洲にして諾せずんば、書院は無きに等しと、蘭洲よつて諾し、始て講を開きしに非ずや、蘭洲東游十餘年にして歸れば、甃菴病氣勝にて日講も絕々なりしを、蘭洲徐々に學規の振作を說き、甃菴も亦喜んで敎授を助けんことを請ひ、再び懷德堂に助敎として經を講ずるに至れり。よ

つて蘭洲は住居を歸阪後五年の寛保三年九月に堂中に移せり。されど年已に老い、且表面に立つを好まざりしより、春樓先師の子たるを以て學主となり、竹山預人となれり。世の懷德堂を說く者、重を石菴、甃菴、に置きて蘭洲の功績を知る者蓋し希なり。蘭洲の懷德堂に於ける、常に助敎の地位に甘んじて一たびも學主預人とこそ爲らざれ、懷德堂の敎育に關し、將又大阪文學の根柢を養ひし点に關し、其功績反て石菴、甃菴の上にあり。

蘭洲經を執て徒に授くる事二十年、初め堂規を揭ぐるや、石菴は無緣の人は叨に講席に入るを禁じたりしが、蘭洲西歸の後、尼ヶ崎町の年寄川井立牧より、無緣の人にも聽講せしめられては如何との申込あり。蘭洲の意見にて町內丈は無緣の人にても苦しからざる事に定めたり。此に至りて懷德堂の講義は半公開の姿となれり。次に席順なるが、最初の壁書に武家たるべき事とありしを

一、書生の交は貴賤貧富を論せず、可レ爲二同輩一事

但し大人小子の辨は可レ有レ之候、座席は新舊長幼學術の淺深を以て面々可レ被レ致二推讓一候

と改め、階級制度の嚴なりし時代に學問上は貴賤貧富の差別を認めず、士民平等の思想を表白せしは懷德堂の特色を見るべし。第三は寶曆八年八月蘭洲等連署の懷德堂定約附記なり。舊定約には、學主の任は父子相續を許さゞりしに、附記には學主死後、適當の人を求め難くして、其子弟に相應の人あらば、相續苦しからざることに改め、次に舊約には、學主預り人（公務）支配人（町務）を置くこと

なりしも、支配人は無用なるをもて、學主は教導を司どり、預り人は公務を引受くることゝなし、學主預人を兼ねるを許さずと改め、更に講師助講の事を記して、學德ある人を招請して講談を依賴すべしと爲し、次の一條あり。

一、四書五經道義の書而已講談いたし、他の雜書講候事一切無用と申義に候へ共、餘力に詩賦文章或は醫師をも心懸候人へ、內證にて講じ聞せ、或は會讀にいたし、或は詩會文會等致候事は格別の義と存候、萬年も內證にて醫書詩集等講じ聞せ候事も有之候、但し表向の講談に致間敷事は定約の通可レ爲二勿論一候

舊約には人寄の爲に詩文を講ずるを禁じ、從來の懷德堂の道學を主とし、これによりて風敎を正しくせんと期し、文華の觀るべきものなかりしを、蘭洲に至りて學力の根柢も深く、詩文にも長せしより華實並び收めんと此に學規を改めしは、懷德堂學風の一變と謂ふべく、他日竹山、履軒等の經術文章其盛を致して、海內の欽仰する所となりしは、由來する所ありといふべし。寶曆十二年三月蘭洲歿す時に竹山三十四。履軒三十一。已に鬱として一家を成せる者は實に蘭洲の恩なり。

これより前、寶曆七年八月、春樓大學を開講し、同じく九年蘭洲中風に罹りしより、代つて易傳を講ず。竹山は預人なれば其專職は公務にあれど、學主の春樓病身の爲に臨時に易傳の助講毎々なりけるが、寶曆十一年九月以後、二七の朝講は竹山引受け、其後蘭洲も物故せしより、預人を以て敎授を

兼ね、近思錄其他の諸書を講じたりといふ。春樓學主たる事二十五年にして天明二年十月歿す。春樓歿後は竹山代りて學主となり、預人を兼ねたり。春樓學主たりし間は、竹山は預人なり、後輩なり、意の如くならず、敎授片手に著述に從事して獨り儒法を守りしが、此に至りて學校建立の趣意に返り儒風を振興すべきを述べ、諸同志も其意に從へり。竹山は學問の宗旨を明にせんが爲に、先づ白鹿洞學規を巨板に新刻し、開講の日、之を講堂の楣上に掲示し、以て程朱の學を標榜せり。此より二七の朝講は尙書、夜講は近思錄、其他、伊洛淵源錄の會談、大學の開講、左傳の會讀を始め、更に詩會をも開き、朔日十五日の休日の外は、間斷なく學課を督勵せしかば、宿弊一洗して、學風大に振ひ、生徒日に進みて盛を一時に鳴らすに至れり。

寛政四年五月、大火の爲に懷德堂も全部類燒し、重立ちたる同志も火災に罹らざるなし。竹山一期の心配は學校の再建なり。享保の前例もあれば公儀普請を願ふの外なく、尙此機會に學校を擴張せんと思ひ、城代堀田侯に內願し、堀田侯の賛同を得て、樂翁公及び松平和泉守、堀田相模守などに出入して學校再興を願出しに、何れも舊交の諸侯なれば願意を聞置かれ、一先づ大阪に歸り、表立ちて町奉行所に願出づべしとの沙汰なり。よつて直に町奉行所に願出で、是の歲は何の事もなく、翌五年三月、學校繪圖面を差出すべしとあり。因て懷德堂元敷地二百三十坪の上に添地を願ひて、聖廟拜殿文庫敎授住宅等をも建築すべき繪圖一枚と、聖廟等は取止めて、元敷地の儘に、講堂學寮等をも增建す

べき繪圖一枚との二通を差出したり。されど再三見積の變更を命せられ、減額に減額を重ねて三年の哀願に贏ち得し所、僅々三百兩の補助に過ぎず、所詮豫定の校舍再築は出來難きも、寛政七年八月鋤始、先づ學校より着手し、次に門塀、次に玄關講堂、東西房に及び、追々建立して、翌八年七月竣工工費總計七百餘金に及びしに、公金三百兩の外は、同志門人の働きにて滯なく濟みたりしは、竹山の學德力量に依れり。蓋し甃菴の寶曆度の講舍改築と並んで永く銘記すべき事柄たり。

寛政八年に學校再建成就して、竹山の志成りしと共に、長子蕉園の天才人に絕し、學業大に進みければ、翌九年八月を以て竹山隱退を告げ、蕉園をして家名を相續せしむ。尤も學主は竹山にして、學校預人の名義は之を蕉園に讓れり。されど蕉園は享和三年八月を以て逝き、竹山も亦蕉園病歿の翌年なる享和四年、即ち文化元年二月を以て懷德堂の正寢に終れるより、其遺言により弟履軒和泉町の水哉館に在りしが、月々四九の講席のみは受持ちたりき。此に再び履軒と懷德堂との關係を生じたり。元來履軒も竹山と同じく幼より懷德堂に育ちしも、二男の事とて壯時は表面學校の事に携はりしことなく、一時竹山の不在中學校の世話を爲しき。されど履軒は本來水哉館に割據せしより、文化元年竹山逝去に至る迄の三十六七年間は全然懷德堂に關係せざりき。履軒の懷德堂講經は何年迄繼續せしや記錄なし。要するに懷德堂は竹山死するも、履軒巋然として猶存せし間は、江戸の昌平黌と對峙して關西唯一の學府の重鎮たりき。

竹山歿後の懷德堂は別に學主を置かずして預人と敎授とより成り、敎授は履軒なりしが、履軒歿後預人兼敎授たりしは竹山の第七子碩果なりき。竹山履軒の盛時に繼ぎて懷德堂の名聲を赫々たらしめんことは、何人も困難を免れず。碩果は此困難なる時代の繼承者となりしより、家學を恪守して既成の業を保持するに力め、高く自ら標置して四方俗儒と交游せず。懷德堂の學風斯に至りて又一變せり

文政八年六月は懷德堂が幕府の官許を得たりし創學壹百年に當りしより、其旨屆出ければ、市尹より緒を承くること永久にして先業を墜さゞるを賞し、之を將來に傳へて永世渝らざらんことを戒飭せり。碩果は天保十一年三月、病歿せり、是より先き姪の並河寒泉を養ふて嗣となし、碩果は敎授、寒泉は學校預人となりしが、後寒泉本姓に復せしより、更に從弟柚園の子後桐園と號せしを養ふて嗣と爲せしが、碩果歿後、桐園を學校預人と爲し、寒泉は敎授となれり。

寒泉桐園の懷德堂を管理せしは、天保十一年より、明治二年に至る三十年間なり。寒泉の學は一に程朱を尊奉して、多岐に涉らず、門下に課するに經史兼修を以てし、諸子は喜はず。實學實行を主として、文華に騖せ德行に疎なるを厭ふ。要するに、碩果以來閉鎖退嬰の方針に出で、寒泉桐園皆其風を守り、學校の中に割據せしかば、竹山時代の大學は此に名實共に一鄕校とは爲れり。然れど儒林の世業を紹ぎ、學風の醇粹を期して、人をして正學此に在るを知らしめて、以て歸嚮する所あらしめしは、世道人心に裨益せしこと尠からず。而して懷德堂掉尾の事業として、寒泉桐園の力を盡しゝは、

文庫の建築、逸史の上木、聖廟創建の企等なりき。伏見鳥羽の戰ありて、大阪も人心恟々、懷德堂も一時業を休みてありけるが、やがて騷亂も鎭まりしより、以前の如く敎授を始めたり。此頃に於ける特筆すべき事柄は明治元年の山階宮晃親王の懷德堂へ台臨あらせられしことなり。

王政維新の後は、學問上にも大影響ありて、新しきを尙び、舊きを厭ふ時代の傾向は、洋學の天下となり、懷德堂も門前の雀羅を奈何ともする能はず、頽勢の支持すべからざるを知り、校門を閉せしは明治二年十二月、一時廢絕の已むなきに至れり。甃菴創立の享保九年を去ること一百四十有六年なり

二、新懷德堂沿革（懷德堂記念會記錄抄錄）附、年譜

懷德堂學徒離散して、絃誦の聲を絕つこと四十年にして、復興の氣運は茲に復た開けぬ。而して實に其端を大阪人文會に發せり。人文會は大阪府立圖書館長今井貫一君の首唱に係り、大阪人文の發達を討査し、闡幽發微、以て文化と風敎とに貢獻せんとする在阪好學の士より成りしものなり。

明治四十三年一月、會員西村時彥君、其例會に於て懷德堂敎授たりし五井蘭洲の傳を講演せしに、講畢りて後、懷德堂師儒諸先生の爲に公祭を擧行せばやとの議、期せずして衆口より發し、全會一致之を可決せり。是より先き、中井竹山の曾孫中井木菟麿君は重野成齋の紹介を以て、大阪市史編纂員幸田成友君と共に西村君を訪ひて、懷德堂公祭の擧に謀り及べりしが、時未だ到らずして其事中輟せり

此に至りて人文會首唱實行の責に任ずることゝなりしは會員全體の篤志に出づるなり。是れ實に懷德堂復興の濫觴にして、又現在懷德堂記念會創立の發端なり。人文會の議に曰く、懷德堂は幕府の保護と志ある市民の協力とに成りし公立の學問所なり。然れば公祭は大阪人文會の私すべきに非ずして、大阪府敎育會は勿論、懷德堂に緣政深き鴻池善右衛門君、住友吉左衛門君を初として、同志の紳士に請うて發起人たらんことを以てすべしと。因りて同年九月、西村時彥君は會の決議を齎らして、歷訪勸說せしに、皆深厚なる同意を表し、此の擧の世道人心に大なる關係あるを贊し、奮て發起の責に任ずべしとの快諾を得たり。斯くて九月二十五日發企人會を開き、其互選に由り、住友吉左衛門君を會頭に小山健三君を副會頭に推し、會則を議定し、會に命くるに懷德堂記念會の名を以てせり。かくて會の成立するや、先づ之を中井家遺族及び舊故に告知し、會の宗旨とする報本反始の義を明かにし、次に新聞紙上にて會の成立を江湖に告白し、又學術講演會を開きて、會の趣旨を普及し、汎く有志の入會を勸誘せしかば、會員を得ること、南は九州、北は北海道に亘り、特別會員六百二十二名、普通會員一千三百七十名の多きに上れり。

明治四十四年十月五日、懷德堂開講記念日を以て、大阪市公會堂を用ひて祭場とし、儒禮に依りて祭典を執行し、六日七日の兩日を以て、東西兩大學の碩學を聘して、記念學術講演會を開き、同月一日より六日に至るの間、中井家を始め諸家襲藏の懷德堂先賢遺書遺物を展觀し、更に懷德堂師儒の遺

著十種（萬年先生論孟首章講義、甃菴先生五孝子傳、富貴村良農事狀、竹山先生蒙養篇、貞婦記錄、蘭洲先生茗話、勢語通、竹山先生奠陰集、國字牘、履軒先生論語逢原）を選擇編纂して、懷德堂遺書と題し記念刊行せり。

明治四十五年三月、剩餘金六千餘圓處分協議會を開き、剩餘金を基本資產とし、本會と同一の目的の下に更に、法人組織の懷德堂記念會を創立し、有終の美を濟さんとの議を決し、五月に至り委員の手になれる寄附行爲案の脫稿を見しも、設立者の推薦に幾多の時日を費せし時、恰も明治天皇登遐の事あり。國民考妣を喪せしが如く、荏苒星霜を更む。大正二年六月に至りて協議會を開きて、寄附行爲案を可決し、財團法人懷德堂記念會設立者として、永田仁助君、西村時彥君、今井貫一君、水落庄兵衛君、廣岡惠三君を推し、同月三十日法人設立を出願し、八月二十日許可せらる。次で永田仁助君を理事長に選擧し、九月一日法人登記を得たり。其趣旨及び寄附行爲左の如し。

○財團法人懷德堂記念會趣旨

維新前に於ける我が大阪唯一の學校なりし懷德堂は、中井甃菴先生が大阪の商人なる中村睦峰（三星屋武右衛門）富永芳春（道明寺屋吉左衛門）長崎克之（船橋屋四郎右衛門）吉田盈技（備前屋吉兵衛）山中宗古（鴻池又四郎）の五有志と謀りて、諸同志を糾合し、三宅石菴先生を聘して、尼ヶ崎町一丁目北側に創立せし者にして、時に享保九年

なり、同十一年幕府の官許を得てより、大阪學問所とも稱し、石菴先生歿後は、甃菴先生學主となり、五井蘭洲先生教鞭を執る者前後二十年。尋きて甃菴の子竹山、履軒二先生崛起してより、大阪の文學雄を海内に稱じ、子孫相繼きて業を世にし、以て維新の際に至る、世態一變して、學校も亦廢したりしが、創立より廢學に至るまで、絃誦の聲を絶たざるもの實に百四十餘年なり。竹山履軒二先生の門、人材輩出して海内に分布し、以て一世の文化を振興せり。斯る大儒を我が大阪に出しゝは豐太閤の大阪城にも讓らざる偉蹟と謂ふべし。然れども我々後人の最も深く懷德堂に感銘する所以の者は、大阪唯一の學校として、大阪の文教を主るもの久しく、大阪人を教育して其品性を養ひ其風俗を正し、以て世道人心を維持せしに在り。我が大阪は古より商業を以て著はれ、國運振張の今日に在りて、亦商工業の中心と稱せらるゝ所以の者は、古來養成したる大阪人の品性と良習慣とに起因すべく、品性と良習慣とは並に教化の致す所にして、懷德堂百四十餘年間の文教に負ふ所の者莫大なり。君父師は之を三恩と曰ふ。報本反始は人の道なり。大阪人たるもの今日の盛を致しく所以を思ふて、而して祖先の受けたる教化の恩を銘し、以て將來の德育に留心せざる可らず。顧ふに天地の在らん限り、人類幸福の基礎は道德に在り。國家の隆昌も、社會の平和も、家庭の安樂も皆此に根柢す。而して商業上道德の尙ふ可きは固より言を待たず。古來の教化の効、能く盛を今日に致せる大阪が亦能く繁榮を將來に獲んと欲せば、一たび其頭を回して、源に溯り故を溫ねんことを

要す。則ち我が大阪人が今古に俯仰して自ら省み自ら戒むるに適當なるは懷德堂の歷史に若くなし是れ灣きに懷德堂記念會を興し、明治四十四年十月五日（十月五日は幕府の官許を得て講を開きたる記念日なり）を卜し、懷德堂師儒諸先生の靈を祭り、且つ碩學を聘して講演を開き、遺書を刊行し、遺墨を展覽し、以て一は百四十餘年間敎化の恩に報い、一は世道人心の振興に資するところありし所以なり。厥後同會發起人及び役員相會し、同會の剩餘金を以て基本資產とし、更に同一の趣旨の下に、懷德堂記念會を興し、有終の美を濟さんことを決議せらる。是れ這般本會の設立を見たる所以にして、即ち此れを財團法人の組織となし、以て本會の趣旨を永遠遂行せんことを期す。因て此に其成立の來歷を宣明す。

大正二年九月一日　　理事長　理事　連名

○財團法人懷德堂記念會寄附行爲

第一章　目　的

第一條　本會は左の方法に依り、國民道德の進步に力め、學術の發達を圖り、本邦文化の向上に資するを以て目的とす

一、學術講演會を開くこと

二、講演集及び其他圖書の編纂出版をなすこと

三、大阪先賢の事蹟及び著書を調査表彰すること

四、奬學金を支出し、學術の研究を奬勵すること

第二章　名　稱

第二條　本法人は懷德堂記念會と稱す

第三章　事務所

第三條　本會の事務所は大阪市東區豊後町懷德堂に置く

第四章　資　金

第四條　本會は舊懷德堂記念會より引繼ぎたる金六千圓及び有志者の寄附金を以て基本財産とす

第五條　基本財産の管理方法は理事會に於て之を定む

第六條　本會の經費は基本財産より生ずる利子及事業より生ずる收入を以て之に充つ

第七條　本會の會計年度は毎年四月一日に始り、翌年三月三十一日に終る

第八條　基本財産は理事會の決議に依り、動産を不動産に或は不動産を動産に變ずることを得

第五章　役　員

第九條　本會に左の役員置く

理事	五人	互選に依り内一人を理事長とす
幹事	二人	
評議員	三十人	

第十條　理事の任期は二年とす、但し滿期再選を妨げず、本法人設立の際に在ては、設立者を以て理事とし、前項の期間在任す理事の任期滿了したるとき、又は缺員を生じたる時は、評議員會に於て維持會員中より改選又は補缺選擧す、補缺理事の任期

は前任者の殘任期間とす

第十一條　理事は本財團を代表して諸般の事務を掌理し、理事長之を統括す

第十二條　本法人設立の際に於ける評議員は、理事會に於て囑托す、評議員に缺員を生じたる時は、評議員に於て維持會員中より補缺囑托す

第十三條　評議員は本財團の重要事項に關し意見を述べ、且之れが協議に應ず

第十四條　幹事の職務及任免に關する規定は、理事會の決議を以て別に之を定む

第十五條　本會に金壹百圓以上を寄附したる者及評議員會の推選したるものを以て維持會員とす

第六章　維持會員

附則

第十六條　本寄附行爲は理事會の決議に依り、主務官廳の認可を得て變更することを得

大正三年本會の目的及事業の計畫畏くも　天聽に達し、同年三月五日金貳百圓を下賜せらる。同四年六月、講堂敷地として府立大阪博物場西北隅なる三百六十一坪の無償使用許可を得、懷德堂重建の議茲に決し、同年十月地鎮祭を執行し、同五年九月工を竣ふ。是れ復興されたる今の懷德堂なり。是に於てか教授を聘し、主として講義の事に當り、堂務統理の事に任ぜしむるの議を決し、同年十二月廣島高等師範學校教授文學士松山直藏君を聘して懷德堂教授とす。是より先き、十月十五日開堂式を擧行し、十一月四日京都帝國大學文學部教授を聘し、定期學術講演會第一回を開き、爾來毎月二回開

會す。六年一月、會計規則、講義規則を定む。理事西村時彦君に講師を囑託す。一月二十七日開講式を擧げ松山敎授大學首章を講ず。同年四月素讀科を設け、波多野七藏君に敎師を囑託し、五月より敎授を開始す。京都帝國大學助敎授吉澤義則君に講師を囑託して、五月より萬葉集講義を開始す。同年十月十四日記念祭恒典を行ふ。同八年二月吉澤義則君講師を辭す。第三高等學校敎授林森太郎君に講師を囑託す。三月文學士武内義雄君に講師を囑託し、支那に留學せしむ。四月通俗講演規定を定め、六月第一回通俗講演を開く。九月より日曜朝講を開始す。同九年十月十日記念祭恒典を行ひ、兼ねて本堂先師儒諸先生の贈位を報告す。十月敎育勅語謄本を下附せらる。三十日敎育勅語渙發三十年に相當するを以て、勅語捧讀式を擧行し、西村講師勅語を謹講す。十二月武内講師支那より歸る。同十年一月開講の日を以て、敎授敎育勅語を捧讀し、爾來每年の恒式と定む。同月より定日講義を增加し日曜朝講を合せて每週四回とす。同十一年十月八日午前記念祭恒典を行ひ、午後孔子歿後二千四百年記念事業として孔子祭を行ふ。十一日元老松方公爵堂に臨み、堂内一巡の後堂の事業現況につきて敎授の說明を傾聽せらる。同十二年三月武内義雄君東北帝國大學敎授に任命せらる。同年四月大阪高等學校敎授文學士財津愛象、文學士稻束猛二君に講師を囑託す。同月より每週一回文科講義を開始す。同年七月二十七日畏くも本會事業の狀況　天聽に達し、金參千圓を下賜せらる。十一月吉田鋭雄君を講師とす。　同月文部省在外研究員を命ぜられ、支那に向け出發す。　十二月孔子歿後二千四百年記念事

業の二たる校印論語義疏成る。同十三年五月二十二日江木文部大臣堂に臨み、堂内を一巡して後、熱心に堂の沿革事業現況につきて教授の説明を聽取せらる。七月三十日宮内省御用掛にして本會の評議員兼講師なる西村時彦君歿す。八月十日遺骨を堂に安置し、翌日追悼祭並に告別式を行ふ。十四年六月、吉田鋭雄君支那より歸る。懷德堂文科學術講演集同百科通俗講演集各第一輯成る。七月二十九日西村家の請に依り故西村時彦君一年家祭を堂に行ふ。八月五日より十二日に至る一週間、支那學講習會を本堂に開く。九月七日、故西村博士記念會より、同博士舊藏書全部を碩園記念文庫の名を附して保存すべく、本會に寄贈せらる。同月十八日、永田仁助君より漢學奬勵の爲め、奬學資金五萬圓を寄附せらる。十月二日江木司法大臣堂に臨み、堂内一巡の後、教授より堂の沿革事業現況につきて説明するところあり。同十五年四月十六日若槻總理大臣堂に臨み、堂内を一巡せらる。堂の事業現況につきて教授より説明するところあり。五月二十七日、懷德堂書庫並研究室地鎮祭を執行す。六月一日起工す。七日久邇宮殿下同妃殿下御同列にて本堂に成らせらる。松山教授より懷德堂の歴史、懷德堂記念會の由來、本堂にて現に行ひつゝある事業の大要を御説明申し上げ、尙懷德堂遺書、記錄、懷德堂記念會出版物などを台覽に供し、今井理事松山教授交々御説明申し上ぐ。七月懷德堂文庫閲覽規則及び懷德堂記念會奉祀規定を定む。九月懷德堂漢學奬勵規定並同給與規定及び懷德堂職制を定む。十月三十一日書庫並研究室工を竣る。

附、年譜

大正二年八月二〇日　財團法人懷德堂記念會設立許可

三、三、五　金貳百圓　御下賜

四、六、　府有地無償借用許可

五、九、　重建懷德堂竣工

五、一〇、一五　開堂式擧行

五、一一、四　定期講演第一回開會、爾來每月二回開會

五、一二、　教授招聘

六、一、二七　開講式擧行、爾來每週二回定日講義

六、五、　素讀科開始

八、六、　通俗講演第一回開會、爾來每月一回開會

八、九、　日曜朝講開始

九、四、　定期講演回數を增加して每週一回とす

九、一〇、　教育勅語謄本下附

九、一〇、三〇　敎育勅語捧讀、式擧行後勅語謹講
一〇、一、　敎育勅語捧讀式擧行、爾來每年一月開講日を恒式日と定む
一〇、一、　定日講義每週一回增加
一一、一〇、八　孔子祭執行（孔子歿後二千四百年記念事業之一）
一二、四、　文科講義開始
一二、七、二七　金參千圓　御下賜
一二、一二、　校印論語義疏並校勘記成る（孔子歿後二千四百年記念事業之二）
一四、六、　懷德堂文科學術講演集第一輯、同百科通俗講演集第一輯印行
一四、八、　支那學講習會を開く
一四、九、七　故西村博士記念會より同博士遺書全部を寄贈
一四、九、一八　永田仁助君より漢學奬勵のため奬學資金五萬圓寄附
一四、一一、　重印懷德堂考成る
一五、六、七　久邇宮殿下同妃殿下台臨
一五、一〇、　書庫並研究室竣工

(二) 懷德堂職制

第一條　懷德堂ニ左ノ職員ヲ置ク

教授　一人
助教授　若干人
書記　若干人
司書　若干人

第二條　教授ハ理事會ニ於テ招聘シ助教授書記及司書ハ教授ノ推薦ニヨリ理事會之ヲ囑任ス

第三條　教授ハ堂ヲ統理シ教務ノ計畫遂行ニ任シ兼ネテ講義ヲ擔當ス

第四條　助教授ハ教授ノ指揮ヲ受ケ教務及講義ヲ分擔ス

第五條　書記ハ教授及理事ノ指揮ヲ受ケ庶務及會計ノ事ニ任ス

第六條　司書ハ教授ノ指揮ヲ受ケ文庫ノ事務ニ任ス

第七條　重要ナル堂務ニ就テ指導ヲ受ケンガ爲メニ顧問ヲ置クコトアルベシ

第八條　顧問ハ理事會ニ於テ請囑ス

第九條　講義ヲ分擔スル爲メ講師ヲ置クコトヲ得

第十條　講師ハ教授ノ推薦ニヨリ理事會之ヲ囑託ス

(三)　懷德堂幷懷德堂記念會諸規則諸規定

一、懷德堂講義講演規則

第一條　本堂ハ德性ノ涵養學術ノ研究ヲ目的トシ左ノ講義講演ヲナス

第二條　本堂ノ講義ヲ分チテ文科講義、定日講義、日曜朝講ノ三種、講演ヲ分チテ定期講演、通俗講演ノ二種トス

第三條　文科講義、定日講義ハ一ケ年ヲ三期ニ分チ、一月十一日ヨリ三月末日マデヲ第一期トシ、四月十一日ヨリ六月末日マデヲ第二期トシ、九月一日ヨリ十二月二十日マデヲ第三期トス

第四條　文科講義、定日講義ノ課程及ビ教科書ハ別ニ之ヲ定ム、日曜朝講ハ孝經四書ヲ反覆順講ス

第五條　文科講義、定日講義ノ聽講生タラントスル者ハ聽講志望書（用紙は本堂之を交附す）ヲ差出サルベシ　但二十歳未滿ノモノハ父兄若クハ長上ノ連署ヲ要ス　但文科講義聽講生タラントスル者ハ中等學校卒業程度以上ノ學力アルモノニ限ル

第六條　定期講演ハ七八兩月ヲ除ク外毎月毎週土曜日、通俗講演ハ毎月一回若クハ二回之ヲ公開ス

（一月四月九月ハ十日マデ、十二月ハ二十一日以後休講）其講師及ビ演題ハ豫メ之ヲ廣告ス

第七條　講演並ニ日曜朝講聽講者ハ聽講者名簿ニ住所職業氏名ヲ自署シ若クハ住所職業ヲ附記セル名刺ヲ差出サルベシ

第八條　本堂ノ講演並ニ日曜朝講ノ聽講ハ無料トシ定日講義聽講生ニハ堂費トシテ毎期ノ始ニ於テ一ケ月貳拾錢ノ割合ヲ以テ納入セシム文科講義聽講生ハ授業料トシテ毎月貳圓ヲ納入セシム

第九條　本堂ニ於テ特殊ノ研究ヲナサントスル者ノ爲ニ特別講義ヲナシ一定ノ期間臨時講演ヲ開クコトアルベシ其規定ハ臨時之ヲ定ム

二、素讀科規則

一、素讀科ハ孝經四書全部ヲ課シ一箇年ヲ以テ修了スルモノトス

一、素讀生ハ滿十二年以上十八年以下ノモノニ限ル

一、素讀生タラントスル者ハ父兄又ハ後見人連署ノ志望書ヲ差出スベシ（用紙ハ本堂之ヲ交附ス）

一、素讀科ハ毎週月、木、土曜日ノ三回午後一時ヨリ同六時マデノ間ニ於テ來堂順ニ之ヲ授ク

一、素讀生ハ授業料ヲ徵セズ

一、素讀科終了者ニハ修業證書ヲ授與ス

三、懷德堂通俗講演規定

第一條　懷德堂通俗講演ハ一般市民ノ常識ヲ養ヒ品性ヲ向上セシムルヲ以テ目的トス

第二條　懷德堂ノ通俗講演ハ本會講堂及市内適宜ノ場所ニ於テ之ヲ行フ

第三條　本事業遂行ノ爲ニ特ニ理事長ヨリ委囑シタル常任委員及ビ臨時委員ヲ設ク

第四條　常任委員ハ講師ノ依囑會場ノ借用案内狀及聽講券ノ印刷配布其他講演會開催ニ關シ重要ナル計畫準備ノ事務ニ當ルモノトス

第五條　臨時委員ハ會場ノ整理聽講者ノ勸誘其他講演會開催當日ニ於ケル一切ノ事務ニ當ルモノトス

四、懷德堂文庫閲覽規則

第一條　懷德堂文庫ハ特ニ漢學ヲ研究スル人々ノタメニ之ヲ公開ス

第二條　閲覽ヲ志望スルモノハ閲覽志望書ヲ出シ教授ノ許可ヲ受クベシ

但懷德堂聽講生並ニ堂友會員ハ志望書ヲ出スヲ要セズ書記ニ其旨申出デラルベシ

第三條　閲覽者ハ備付ノ名簿ニ姓名ヲ記入シ所定ノ室ニ於テ閲覽スベシ

第四條　閲覽圖書ハ堂外ニ帶出スルコトヲ許サズ

第五條　閲覧者ハ許可ナクシテ妄リニ文庫内ニ出入スルコトヲ得ズ

第六條　閲覧者ハ閲覧票ニ書名並ニ姓名ヲ記入シ文庫係ニ差出スベシ

第七條　一時ニ閲覧シ得ベキ書籍ハ五部ヲ以テ定限トス

但研究事項ニヨリテハ此ノ限ニアラズ

第八條　閲覧者ハ研究事項ニ關シ指導ヲ受クルコトヲ得

指導ヲ受ケント欲スルモノハ文庫係ヲ通ジテ其旨申出デラルベシ

第九條　同時ニ閲覧シ得ベキ人員ハ十人ヲ限リトス若シ之ニ超過スルトキハ一時閲覧ヲ謝絶スルコトアルベシ

第十條　閲覧ハ無料トス

五、懷德堂漢學奬勵規定並同給與規定

懷德堂漢學奬勵規定

第一條　懷德堂記念會ハ永田仁助ガ漢學奬勵ノタメ本會ニ寄附シタル五萬圓ヲ以テ基金トシ年々基金ヨリ生ズルトコロノ利子ヲ以テ別ニ定ムルトコロノ給與規定ニヨリ適當ト認メタル漢學研究者ニ學資若クハ研究費ヲ給與シ又本堂聽講生ノ熱心ナルモノニ賞與ス

第二條　本會ヨリ學資金ノ給與若クハ研究費ノ補助ヲ受ケ得ル者ハ學力佳良志操堅固品行方正ナル左ノ學生若クハ研究者ニ限ルモノトス

一、帝國大學ニ在リテ支那學ヲ專攻スル文學士

一、帝國大學文學部支那學學生

一、帝國大學ニ入學スベキ高等學校生徒

一、懷德堂聽講生ニシテ漢學ヲ研究スルノ志篤ク學力ノ進步顯著ナルモノ

一、永ク懷德堂聽講ヲ繼續シ漢學ヲ以テ修養ニ資セントスルノ志篤キモノ

一、永ク漢學ノ研究ヲ持續シ其成績觀ルベキモノアリテ之ガ研究ヲ助成スベキ價値アリト認メタルモノ

第三條　本會ガ學資給與若クハ研究費補助等ヲ議決スルニハ左ノ理事者ノ合議ヲ經テ意見ノ一致スルヲ要ス

一、寄附者又ハ其ノ現ニ戶主タル家ノ戶主

二、懷德堂敎授タル者

三、懷德堂記念會顧問タル者

四、懷德堂記念會理事タル者

五、懷德堂講師タル者一人

第四條　懷德堂漢學奬勵基金ハ永田仁助寄附金及給與者ノ寄附金ヨリ成ルモノトス之ガ管理ハ懷德堂記念會理事之ヲ爲ス

基金ハ消費スルコトヲ得ズ

基金ヨリ生ズル利子ヲ以テ給與若クハ補助ノ費用ニ充ツ

第五條　懷德堂教授タルモノヲ專務理事トス專務理事者ハ決議執行ノ任ニ當ルモノトス

第六條　第三條第一號ニヨリ理事者タルモノハ監事一名ヲ指定スルコトヲ得監事ノ任期ハ第三條第一號ニヨリ理事者タルモノガ其指定ヲ取消シタル場合ニ滿了ス

第七條　本規定並ニ給與規定ノ變更ハ理事者一名又ハ數名ノ提案ニヨリ理事者全數ノ贊成ヲ要スルモノトス

第八條　懷德堂記念會解散ノ場合ニ於ケル基本金五萬圓ノ歸屬權利者ハ第三條第一號ニヨリ理事者タルモノトス

第九條　懷德堂漢學奬勵ノ事務ハ大阪市東區豐後町懷德堂事務所ニ於テ之ヲ爲ス

懷德堂漢學奬勵給與規定

第一條　懷德堂記念會ヨリ學資ノ給與若クハ研究費ノ補助ヲ受ケントスルモノハ所定書式ノ願書ヲ差

出スベシ

願書ニハ戸籍謄本及醫師ノ身体檢査書ヲ添付スベシ

第二條　願書ニハ保證人一名及本人未成年者ナルトキハ親權者又ハ後見人ノ署名捺印ヲ要ス

第三條　保證人ハ能力者ニシテ辨濟ノ資力ヲ有スル男子ニ限ル

第四條　給與又ハ補助月額及其期間ハ理事者會ニ於テ之ヲ定ム

第五條　學資ノ給與ヲ受ケタルモノ休學セントスル場合ニハ本會ノ許可ヲ受クベシ

休學中ハ全部マタハ一部ヲ給與スルコトアルベシ

第六條　研究費ノ補助ヲ受クルモノ病氣ノタメ研究ヲ持續スルコトアタハザルモノハ其補助ヲ止ムベシ

第七條　給與若クハ補助ヲ受ケタルモノハ適當ナル機會ニ於テ懷德堂ニ於テ講義講演ヲ爲スノ義務ヲ負フモノトス又本會ノ給與モシクハ補助ニナレル著述ハ懷德堂ノ名ヲ以テ之ヲ公ニスル義務ヲ負フモノトス

第八條　學資ノ給與若クハ研究費ノ補助ヲ受ケシモノ後來報謝ノ爲メ本會ニ金員ヲ寄附スルモノアルトキハ之ヲ收受シ漢學奬勵基金中ニ加フルモノトス

第九條　給與若クハ補助ヲ受クルモノ給與若クハ補助ヲ受クル資格ヲ汚損スルノ行爲アリタルモノハ

其給與補助ヲ止メ既ニ給與モシクハ補助セシ全部ヲ六ケ月内ニ返濟ヒシム返濟ニ關シテハ保證人ノ債務ハ連帶トス

第十條　給與若クハ補助ヲ受クルモノハ其金額受領ノ都度領收證書ヲ差出スベシ

願書々式ハ左ノ通リトス　（用紙美濃紙）

收入印紙（參錢）	○本人	○保證人

學資給與（研究費補助）願

本籍
住所
戸主（又ハ某何々）

（何科大學々生、大學院學生、何々教室助手又ハ副手、何々高等學校生徒）

氏名
年月日生

私儀貴會漢學奬勵規定ニヨリ學資給與相成度御許可ノ上ハ學術品行共ニ貴會ノ體面ヲ汚損スルガ如キ行爲ヲナサザルベキハ勿論斯學ノタメニ力ヲ盡シ貴會奬勵ノ趣旨ニ副フコトヲ力ムベク

成業ノ上ハ適當ナル機會アレバ貴會ノタメニ講義講演等ノ勞ヲ執ルベク候（研究成就ノ上ハ貴會ノ名ヲ以テ著述ヲ刊行致スベク候）若シ萬一給與金（補助金）返濟ノ場合生ジタルトキハ保證人連帶ニテ其責ニ任ズベク候此段保證人連名ニテ奉願候也

追テ給與（補助）月額期間左ノ通リ相願候

一、給與月額　一、期間　自何年月　至何年月

年　月　日

右

氏　名㊞

（未成年者ナルトキハ親權者又ハ後見人）　氏　名㊞

住所

保證人　氏　名㊞

財團法人懷德堂記念會御中

六、懷德堂記念會會計規則

第一條　本會ノ會計ハ特別ノ場合ヲ除クノ外本則ニ依ル

第二條　本會ノ理事中ノ一人ニ現金有價證券ノ保管及出納ヲ委任ス

第三條　出納主任理事ハ左ノ各項ニ限リ之ヲ專行スルコトヲ得但各項以外ノコトハ理事會ノ決議ヲ經テ執行スルモノトス

一、一口參拾圓以下ノ物品ノ購入並ニ賣却

二、一口參拾圓以下ノ建築工事及修繕工事ノ執行

三、急ヲ要スルタメ理事會ヲ開ク暇ナキ場合但施行後理事會ノ承認ヲ得ルモノトス

第四條　毎年度經費豫算ハ基本金利子、雜收入、寄附金ヲ以テ之ニ宛テ翌年度ノ豫算ヲ毎年三月末日迄ニ作成シ理事會ノ決議ヲ經テ之ヲ定ム

第五條　本會基本金及收入金ヲ所定ノ銀行ニ預金シタル時ハ其預金證券又ハ當座預金通帳ハ出納主任理事之ヲ保管スルモノトス

但毎月三十圓以内ノ現金ヲ便宜役員ニ前金渡ヲナスコトヲ得此ノ場合ニ於テハ翌月ニ至リ前月分ノ收支決算書ニ證憑書ヲ添ヘ出納主任理事ノ承認ヲ受クルモノトス

第六條　毎年度經費豫算ハ左ノ各項目ニ依リ收入及支出ヲ區分スルモノトス

○收入

一、基本金利子　　二、雜收入　　三、寄附金

○支出

一、俸給及諸給（役員俸給、小者給料、講師手當、旅費、報酬、人足賃等）

二、需品費（備品、帳簿、用紙、筆墨印肉、薪炭油類、通信費、運搬費、其他雜用消耗品、接待費等）

第七條　金錢並ニ物品ノ收支計算ヲ明瞭ナラシムル爲本會ニ左記諸帳簿ヲ備フ

一、收入簿（基本金利子、雜收入、寄附金等ノ出納ヲナスタメ）

二、支　出　簿（其年度ノ經費ニ不足ヲ生ゼザル樣日常一目瞭然タラシムルタメ）

三、現金出納簿（現金ノ收入及支拂ニ對シ其受拂ヲ明瞭ナラシムルタメ）

四、物品購入簿（備品消耗品購入ヲ明瞭ニシ出納主任理事ノ承認ヲ明カニスルタメ）

五、消耗品受拂簿（消耗品受入ト使途ヲ明瞭ナラシムルタメ）

六、備品現在簿（備付物品ノ受拂ヲ明瞭ナラシムルタメ）

七、財　産　簿（基本金、動産、不動産ノ口座ヲ設ケ常ニ財産ヲ明瞭ナラシムルタメ）

第八條　物品ノ購入其他金錢出納ハ凡テ出納主任理事ノ承認ヲ經ルモノトス

第九條　出納主任理事ハ理事中ヨリ理事會ニ於テ互選ノ上委囑スルモノトス

第十條　出納主任理事ハ金錢及物品ノ出納其他收支計算ニ付テハ一切ノ責任ヲ負フモノトス

第十一條　出納主任理事ハ便宜本會ノ書記ニ其出納ヲ命シ監督ノ任ニ當ルコトヲ得

但シ之ガ爲メ前條ノ責任ヲ免ルコトヲ得ズ

第十二條　出納主任理事ハ毎年度ノ收支決算書ヲ作成シ毎年度完結後三十日以內ニ理事會ニ報告シ且ツ監査役ノ監査ヲ受クルモノトス

第十三條　會計年度ハ毎年四月一日ヨリ翌年三月三十一日ヲ以テ一年度ト定ム

監　査

第十四條　本會ニ評議員中二名ノ監査役ヲ置キ出納事務ノ監査ヲナスモノトス

第十五條　出納主任理事交替ノ場合ハ自己ノ取扱ニ係ル一切ノ書類並ニ出納計算書及引繼目錄ヲ作成シ理事若クハ監査役タル評議員立會ノ上後任出納主任理事ニ引繼ヲナスモノトス

七、懷德堂記念會奉祀規定

第一條　懷德堂記念會ハ本會ノ事業並ニ經營維持ニ功勞アリタル物故者ヲ奉祀シ毎年一回恒祭ヲ行フ

第二條　奉祀者ハ理事會ニ於テ之ヲ銓衡シ評議員會ニ協議シテ之ヲ決定ス

(四)　事　業

一、講　義

(甲)　定　日　講　議

一、目　的

定日講義は聖經賢傳及び本邦古典を講じ德性を涵養し我國民性及び國民道德の淵源を究むるに資するを以て目的とす

二、書　目　及　日　時

韓非子(稻束講師)　春秋左氏傳(財津講師)　毎週月曜日(自午後七時至同九時)

理學宗傳（松山教授）　支那學概論（吉田助教授）　毎週水曜日（同前）

萬葉集（林講師）　周易程傳（松山教授）　毎週木曜日（同前）

三、講義既了書目

論語、禮記纂言抄、書經、宋名臣言行錄抄、大學衍義、古今學變、輶軒語、近思錄（松山教授）

經千簡編、孟子、詩經（至邶風）（故西村講師）

萬葉集抄、記紀歌抄（吉澤講師）

祝詞宣命抄、萬葉集選、古事記抄、古今集選、新古今集選、新葉集選（林講師）

諸子概說、荀子、曾文正公家訓（武內講師）

楚辭、詩經（自衛風）、先哲叢談（財津講師）

（乙）日曜朝講

一、目的

日曜朝講は孝經四書を順講して德性を涵養し仁義忠孝の道德を維持し東洋道德の菁華を知得するに資するを以て目的とす

二、書目及目時

論語（松山教授）　毎週日曜日（自午前九時至同十時）

三、講義既了書目

孝經（一回）論語、孟子、大學、中庸（各二回）

（丙）文科講義

一、目的

文科講義は東西の名著を講じ文科に屬する學術の研究に資するを以て目的とし東西兩洋を兼修せしむるを主義とす

二、書目及日時

哲學「カント」　ファンダメンダル、プリンシプルス、オブ、ゼ、メタフイジックス、オブ、エシックス（アボット英譯）（藤井講師）　朱子語文精要（松山教授）

隔週（第一、三、五）金曜日（自午後六時至同九時）

文學「ゲーテ」　ファウスト（藤代講師）　白樂天詩（鈴木講師）

隔週（第二、四）金曜日（同前）

三、講義既了書目

「カント」　グルンドレーゲング、ツール、メタフイヂック、デル、ジッテン（藤井講師）（講義未完、英譯書ニ變更）

「カント」プロレゴメナ（朝永講師）

丸善獨逸語叢書第二卷　人物評論、雪山俊夫編　レーベン、ウント、ビルヅング（藤代講師）

清沈德潛　杜詩偶評（鈴木講師）

二、講演

（甲）定期講演

一、目的

定期講演は文科に屬する諸學の高等なる學術的知識を普及し文化の向上學術の研究に資するを以て目的とす

二、現行講演題目及日時

東西兩文明の藝術史的考察　京都帝國大學文學部教授文學士　澤村專太郎

生命の諸相　京都帝國大學理學部教授理學士　川村多實二

（毎週土曜日午後七時ヨリ同九時マデ）

三、既了講演題目並講師

孟子概說（十三講）　自大正五年十一月　至同六年二月　京都帝國大學文學部教授文學博士　狩野直喜

國史新話（十三講）	自同五年十一月至同六年五月	同	三浦周行
老子評論（十講）	自同六年六月至同七年一月	同	高瀨武次郎
支那通說（八講）	自同六年六月至同六年十二月	同	桑原隲藏
近世の日本（十一講）	自同七年一月至同七年六月	同	內田銀藏
支那に於ける史の起源（十講）	自同七年二月至同七年六月	同	內藤虎次郎
詩聖杜甫（十五講）	自同七年九月至同八年四月	同	鈴木虎雄
「カント」の倫理學（十四講）	自同七年九月至同八年三月	同	藤井健治郎
現代に映れる西洋古代文明（六講）	自同八年四月至同八年六月	同	阪口昂
青年の心理及其教育（十四講）	自同八年九月至同九年三月	同	野上俊夫
支那通說（八講）	自同八年五月至同八年十月	同	桑原隲藏
國史上に於ける社會問題（十六講）	自同八年十一月至同九年六月	同	三浦周行
「カント」の前と後（十三講）	自同九年四月至同九年十月	同	朝永三十郎
日本に於ける信仰と美術（十六講）	自同九年四月至同十年二月	京都帝國大學文學部助教授文學士	澤村專太郎
朝鮮の文化（十三講）	自同九年四月至同九年十二月	同	今西龍
印度の文化と其潮流（十三講）	自同九年九月至同十年三月	京都帝國大學文學部教授文學博士	松本文三郎

近世支那概觀（十五講）	自同十年一月至同十年十一月	同	矢野仁一
陸象山の學說（十講）	自同十年二月至同十年六月	同	高瀨武次郎
世界戰爭の話（九講）	自同十年三月至同十年十一月	京都帝國大學文學部教授 理學博士	小川琢治
日支文化關係（九講）	自同十年五月至同十年十二月	京都帝國大學文學部教授 文學博士	內藤虎次郎
西洋の藝術及藝術論（十一講）	自同十年九月至同十一年三月	同	深田康算
古代印度に於ける美術に就て（十三講）	自同十年十一月至同十一年十二月	同	榊亮三郎
道德思想の發達（十四講）	自同十年十一月至同十一年九月	同	野上俊夫
日本文化の過程（十九講）	自同十一年四月至同十二年三月	同	原勝郎
現代教育思潮批判（六講）	自同十二年一月至同十二年三月	同	小西重直
支那史上の偉人（六講）	自同十二年四月至同十二年六月	同	桑原隲藏
論語概說（十講）	自同十二年四月至同十二年十月	同	狩野直喜
日本民族概說（十二講）	自同十二年九月至同十三年三月	同	喜田貞吉
國字の話（八講）	自同十二年十一月至同十三年四月	同	吉澤義則
日本語の由來（五講）	自同十三年四月至同十三年六月	同	新村出
有史以前の日本（五講）	自同十三年四月至同十三年六月	同	濱田耕作

周易概說（七講）	自同至同 十三年九月十三年十二月	同	高瀨武次郎
古代中央亞細亞の文明（八講）	自同至同 十三年九月十三年十二月	同	羽田亨
家庭教育と社會教育（五講）	自同至同 十四年一月十四年三月	同	野上俊夫
日本に於ける社會生活の發達（五講）	自同至同 十四年一月十四年三月	同	西田直二郎
大乘佛教の要旨（六講）	自同至同 十四年四月十四年六月	同	松本文三郎
法制の發達（六講）	自同至同 十四年四月十四年六月	同	三浦周行
續國字の話（六講）	自同至同 十四年九月十四年十二月	同	吉澤義則
支那の政治文化及社會（七講）	自同至同 十四年九月十四年十二月	同	矢野仁一
日韓上代關係史（五講）	自同至同 十五年一月十五年三月	同	今西龍
藝術批判史概說（五講）	自同至同 十五年一月十五年三月	同	深田康算
中世支那に移住せし西域人（四講）	自同至同 十五年四月十五年六月	同	桑原隲藏
人格主義の倫理（六講）	自同至同 十五年九月十五年六月	同	藤井健治郎

（乙）通俗講演

一、目的

通俗講演は一般市民の常識を養ひ品性を向上せしむるを以て目的とす

二、現行題目及日時

國際聯盟の話　（第一回九月　第二回十月）　京都帝國大學法學部教授法學博士　末廣重雄

演題未定　（第一回十一月　第二回十二月）　同　法學士　田村德治

（毎月適宜の日曜日に開く）

三、既了講演題目並講師

尊敬すべき實業家夫妻	大正八年六月	京都帝國大學文學部教授文學博士	坂口昂
余が大阪に就職以來經濟界の所感	同　八年六月		片岡直温
黴毒の遺傳	同　八年七月	大阪醫科大學教授醫學博士	和田豐種
子供の躾方に就て	同　八年七月	大阪控訴院檢事	一松定吉
デモクラシーといふ事	同　八年九月	京都帝國大學文學部教授文學博士	藤井健治郎
大戰を顧みて	同　八年九月	大阪高等商業學校教授	玉木三郎
遺傳と眼病	同　八年十月	醫博士	有澤潤
商賣人の學問所	同　八年十月	文學博士	西村時彦
貨幣の話	同　八年十月	大阪造幣局技師工學博士	甲賀宣政
戰後の大阪商人	同　八年十一月	日本棉花株式會社社長	喜多又藏
家庭と化學	同　八年十二月	大阪高等工業學校教授	朝日奈晃十

人生の行路	同八年十二月	大阪府主事	成田軍平
適者生存と國民道德	同九年二月	住友理事	山下芳太郎
都市計畫に就て	同九年二月	工學博士	直木倫太郎
羊頭を掲げ狗肉を賣る	同九年三月	大阪府主事	成田軍平
米國に於ける現實主義と理想主義	同九年三月	大阪府主事	赤松郁太郎
貿易の危機	同九年五月		增田正雄
仁義	同九年五月	住友總理事	鈴木馬左也
經生活の改善	同九年六月	大阪府技師	井上龜五郎
生活改善の原理	同九年六月	大阪府立高津中學校長	三澤糾
印度及南洋視察談	同九年七月	大阪府商工課長	百濟文輔
文化都市の建設	同九年七月	工學博士	片岡安
衡平主義	同九年十月		秦政治郎
一二の戰後問題に就て	同九年十月	住友理事	湯川寛吉
窒素工業に就て	同九年十一月	工學博士	庄司市太郎
度量衡の世の中	同九年十一月	大阪府技師	關菊治
實業上重要問題に就て	同九年十二月	大阪市立工業學校長	杉田稔
今日の經濟界	同九年十二月	大阪朝日新聞編輯局長	高原操

木村蒹葭堂を憶ふ	同 十年一月	文學博士 西村時彦
山片蟠桃を憶ふ	同 十年二月	京都帝國大學教授 文學博士 內藤虎次郎
高橋作左衛門父子の事蹟	同 十年三月	同 新村出
上田秋成に就て	同 十年四月	同 藤井乙男
橋本宗吉に就て	同 十年五月	土屋元作
草間直方に就て	同 十年六月	大阪府立圖書館長 今井貫一
富永仲基に就て	同 十年十一月	京都帝國大學教授 文學博士 內藤虎次郎
尾崎雅嘉に就て	同 十年十二月	同 吉澤義則
度量衡法改正に伴ふ規格統一に就て	同 十一年一月	京都帝國大學教授 工學博士 本野亨
太陽の熱	同 十一年二月	同 理學博士 新城新藏
石炭鑛業と坑夫生活	同 十一年三月	同 工學博士 井出健六
動物の智慧	同 十一年四月	同 理學博士 川村多實二
下水の處分	同 十一年五月	同 工學博士 大井清二
紫外線の話	同 十一年六月	同 理學博士 木村正路
飛行船の話	同 十一年九月	同 工學博士 濱部源太郎
條件論的生命觀	同 十一年十月	同 醫學博士 石川日出鶴丸
有用なる金屬に就て	同 十一年十一月	同 工學博士 近重眞澄

化學と電氣の關係に就て	同十一年十二月	同	中澤良夫
親族の話	同十二年八月	同	法學士宮本英雄
婚姻の話	同十二年二月	同	宮本英雄
親子關係の話	同十二年三月	同	宮本英雄
刑法の話（第一回）	同十二年四月	同	宮本英脩
同（學二回）	同十二年五月	同	宮本英脩
裁判の話	同十二年六月	同	法學博士山田正三
商法の話（第一回）	同十二年九月	同	烏賀陽然良
同（第二回）	同十二年十月	同	烏賀陽然良
最近の法律思想	同十二年十一月	同	菅原眷二
普選を中心とした政治問題	同十二年十二月	京都帝國大學教授法學博士	市村光惠
地殼の釣合及變動	同十三年一月	同	理學博士松山基範
人生と植物	同十三年二月	同	郡場寛
建築の形の變遷	同十三年三月	同	工學博士武田五一
空中に於ける電氣の活動	同十三年四月	同	工學士鳥養利三郎
生物の成長と其の成分との關係	同十三年五月	同	理學博士小松茂
和室の衛生學的研究	同十三年六月	同	學博士戸田正三

工業の發達と自然科學的研究	同　十三年九月	同　理學博士　吉田卯三郎
疾病の起源并に其意義	同　十三年十月	同　醫學博士　藤浪鑑
動物と人生	同　十三年十一月	同　理學博士　川村多實二
自然科學の發達	同　十三年十二月	同　理學博士　新城新藏
國民の海外發展問題	同　十四年一月	同　法學博士　山本美越乃
我國の租稅體系に就て	同　十四年二月	同　同　神戸正雄
經濟の發達（第一回）	同　十四年三月	同　經濟學博士　本庄榮次郎
同　（第二回）	同　年四月	同　同　本庄榮次郎
我國現時の財政に就て	同　十四年五月	京都帝國大學講師　法學博士　小川鄕太郎
大戰の回顧と戰後の貿易逆調	同　十四年六月	京都帝國大學教授　法學博士　小島昌太郎
天運人事數無異同との說に就て	同　十四年九月	同　法學博士　財部靜治
農村問題の思想的背景	同　十四年十月	同　同　河田嗣郎
世界經濟の特質	同　十四年十一月	同　法學士　作田莊一
經濟と道德との關係及合致	同　十四年十二月	同　法學博士　田島錦治
政黨論（第一回）	同　十五年一月	同　同　市村光惠
同　（第二回）	同　年二月	同　同　市村光惠
同　（第三回）	同　年三月	同　同　市村光惠

各國の政治組織（第一回）　同十五年四月　同　法學士　森口繁治
同　（第二回）　同　年五月　同　同　森口繁治
同　（第三回）　同　年六月　同　同　森口繁治

三、素讀

一、目的

素讀は德性の涵養並に漢學の學習に資するを以て目的とす

二、書目

孝經、四書（吉田助教授）

三、日時

毎週月木土曜日の三回午後一時より同六時までの間に於て來堂順に之を授く

四、恒祭並記念講演

恒祭

毎年一回舊懷德堂師儒諸先生懷德堂記念會物故諸先生並に功勞者の恒祭を執行す

（甲）祭神

一、懷德堂師儒諸先生

三宅石菴　三輪執齋　伊藤東涯　中井甃菴　並河誠所
井上赤水　五井蘭洲　三宅春樓　中山竹山　中井履軒
中井蕉園　中井碩果　中井桐園　並河寒泉　中井柚園
懷德堂五同志

二、懷德堂記念會物故諸先生並功勞者（物故順に據る）

物故講師

內田銀藏　原勝郎　西村時彥

物故功勞者

土居通夫　水落庄兵衛　上野理一　鈴木馬左也　小山健三
西村時彥　坂仲輔　住友吉左衛門

（乙）記念講演

每年恒祭執行後碩學を聘して記念講演會を行ふ講演題目並に講師左の如し

敬に就きて　大正六年十月　京都帝國大學教授 文學博士　藤井健治郎

大阪の過去を顧みて	同		伊庭貞剛
宋代の士風	同		懷德堂教授文學士 松山直藏
哲學的理想主義	同	七年十月	京都帝國大學教授 法學博士 朝永三十郎
樣利思想	同		同 織田萬
報恩主義と社會問題	同	八年十月	同 田島錦治
仁義と正義人道	同		東京帝國大學教授 文學博士 服部宇之吉
歷史的眞理	同	九年十月	京都帝國大學教授 文學博士 西田幾多郎
中井竹山先生を憶ふ	同		東京帝國大學教授 文學博士 三上參次
時勢の要求を述べて儒教の活用に及ぶ	同	十年十月	法學博士 仁保龜松
儒教の我國に於ける影響	同		東京帝國大學教授 文學博士 井上哲次郎
國體擁護	同	十二年十一月	法學博士 千賀鶴太郎
儒教の修養法に就きて	同	十三年十月	東京帝國大學教授 文學博士 宇野哲人
竹山先生の經濟學說	同		京都帝國大學教授 經濟學博士 本庄榮治郎
神國てふ國民的信念につきて	同	十四年十月	東京帝國大學教授 文學博士 岡田正之

五、孔子祭

大正十一年十月八日、孔子歿後二千四百年を記念せむがために、本堂講堂に於て昌平校聖堂釋奠儀

注を參酌して孔子祭を行ひ、左の記念講演を行ひ、兼ねて論語義疏を校印せり。

孔子傳の一節に就きて　京都帝國大學教授文學博士　狩野直喜

論語里仁篇富與貴章講義　懷德堂教授文學士　松山直藏

六、出版

本年迄に左の出版をなせり。

一、論語義疏

大正十一年は孔子歿後二千四百年に恰當するを以て、之を記念せむが爲に、論語義疏を校印し、講師武内義雄君專らその任に當る。

二、懷德堂考

西村時彦君の懷德堂考は曾て大阪朝日新聞に連載せられしが、刊本として世に弘布せざりしより、大正十四年十一月。本堂に於て五百部を限り重印し、末尾に懷德堂復興小史及び中井木菟麿君撰するところの懷德堂年譜を附印せり。

三、懷德堂文科學術講演集第一輯

大正十四年より毎年一回若くは數回懷德堂講演集の發刊せらるゝことゝなり、定期講演の一部を編

したるものは同年六月、懷德堂文科學術講演集の名によつて第一輯を東京弘道館より發行せり。

四、懷德堂百科通俗講演集

通俗講演の一部を編したるものは前記の懷德堂文科學術講演集と同じく、同年同月、懷德堂百科通俗講演集の名によりて、第一輯を東京弘道館より發行せり。

七、講習

大正十四年八月五日より一週間、懷德堂に於て支那學に關する夏季講習會を開けり、講師幷に題目左の如し

老子概說　東北帝國大學教授文學士　武內義雄

敦煌石室遺書に就いて　文學士　石濱純太郎

楚辭と漢賦　大阪高等學校教授文學士　財津愛象

八、奬學

本會は永田仁助君が漢學奬勵のために寄附せる金五萬圓を基金として、年々基金より生ずるところの利子を以て、前記規定に據り漢學研究者を補助奬勵す。

九、文庫公開

本會は懷德堂文庫を公開して漢學研究者に便す。該文庫は故西村時彦君を記念せむがために、故西村博士記念會より本會に寄附せられたる同博士舊藏書全部より成る碩園記念文庫及本會藏書の外、愛甲兼達氏の委託に係る故籾山表洲翁舊藏書全部を藏儲す。

(五) 懷德堂學年曆

一月一日	新年	一月三日	元始祭
一月十日	冬季休業終	一月十一日	第一期講義始
二月十一日	紀元節	春分日	春季皇靈祭
三月三十一日	第一期講義終	四月一日	春季休業始
四月三日	神武天皇祭	四月十日	春季休業終
四月十一日	第二期講義始	六月三十日	第二期講義終
七月一日	夏季休業始	七月三十日	明治天皇祭
八月三十一日	天長節	八月三十一日	夏季休業終
九月一日	第三期講義始	秋分日	秋季皇靈祭
十月五日	本堂記念日	十月十七日	神嘗祭
十月三十一日	天長節祝日	十一月廿三日	新嘗祭
十二月二十日	第三期講義終	十二月廿一日	冬季休業始

(六) 顧問、職員、講師

顧問

京都帝國大學文學部教授文學博士　狩野直喜

文學博士　內藤虎次郎

職員

教授　文學士　松山直藏

助教授　吉田鋭雄

書記　藤塚誠二

講師

第三高等學校教授文學士　林　森太郎

東北帝國大學教授文學士　武內義雄

大阪高等學校教授文學士　財津愛象

文學士　稻東　猛

(七) 講義講演聽講者統計

一、講義講演聽講者及素讀生延人員數

講義講演素讀	期間	出席聽講生延人員
定日講義	自大正六年一月至同十五年六月	二七、一七七
日曜朝講	自大正八年九月至同十五年七月	六、〇〇五
文科講義	自大正十二年四月至同十五年六月	一、六一六
定期講演	自大正五年十一月至同十五年六月	二二、四九四
通俗講演	自大正八年六月至同十五年六月	五、六七二
素讀	自大正六年四月至同十五年六月	四九二
合計		六三、四五六

二、定日講義講聽生出席數統計表

學期	全聽講生數	每回平均出席數	出席百分率	出席聽講生延人員
第一年 第一期	二七七	一四四	五二	二、五九三
第一年 第二期	二〇八	一〇五	五〇	二、四二六
第一年 第三期	一一五	五一	四四	一、五七八
第二年 第一期	七八	四一	五三	八二七
第二年 第二期	六六	三六	五四	八三一
第二年 第三期	八〇	三六	四五	一、一〇五
第三年 第一期	六五	三〇	四六	六四五
第三年 第二期	四八	二八	五八	六一三
第三年 第三期	五三	二七	五〇	八七九
第四年 第一期	四九	二七	五五	六一四
第四年 第二期	五三	三〇	五七	七〇一
第四年 第三期	七四	三三	四四	九九九
第五年 第一期	七六	三六	四七	七八七
第五年 第二期	五五	二九	五三	六九九
第五年 第三期	五三	二四	四五	七〇九

第六年 大正十二年	第一期	四三	二
	第二期	四一	二四
	第三期	五五	二五
第七年 大正十三年	第一期	四五	二四
	第二期	六一	二六
	第三期	五二	二三
第八年 大正十四年	第一期	四七	二〇
	第二期	四五	二〇
	第三期	五〇	二一
第九年 大正十五年	第一期	九一	三〇
	第二期	七二	二八
	第三期	七六	二五
第十年 大正十五年	第一期	九〇	二五
	第二期	七九	二三
總計			

第六年 大正十二年	第一期	四九	四七〇
	第二期	五九	五四八
	第三期	四五	七一八
第七年 大正十三年	第一期	五三	五三五
	第二期	四三	九〇七
	第三期	四二	九六二
第八年 大正十四年	第一期	四三	六七一
	第二期	四四	六六六
	第三期	四二	九八五
第九年 大正十五年	第一期	三三	九八四
	第二期	三九	九三三
	第三期	三三	一、一三六
第十年 大正十五年	第一期	二八	八五二
	第二期	二九	八一四
總計			二六、一七七

三、定日講義聽講生職業別統計表

年度	第一年（大正六年）						第二年（大正七年）					
學期	一期		二期		三期		一期		二期		三期	
	聽講生數	百分率	聽講生數	百分率	聽講生數	百分率	聽講生數	百分率	聽講生數	百分率	聽講生數	百分率
官公吏	二七	〇、〇九	二二	〇、一〇	四	〇、〇三	八	〇、一〇	四	〇、〇六	三	〇、〇三
教員	五〇	一、一八	三七	一、一八	二二	一、一八	一八	一、一三	一三	一、一九	一四	一、一八
學生	九	〇、〇三	六	〇、〇二	二	〇、〇一	二	〇、〇三	一	〇、〇一	一四	一、一八
商工業者	五八	一、二〇	三六	一、一七	一七	一、一五	一四	一、一八	一三	一、一八	一二	一、一五
會社店員	七二	一、二五	五一	一、二五	一六	一、一四	一五	一、一九	二〇	一、三〇	一六	一、二〇
庶民	三九	一、一四	二三	一、一一	三	〇、〇二	六	〇、〇七	二	〇、〇三	七	〇、〇八
無職（不明ナ含ム）	一四	〇、〇五	一七	〇、〇八	四一	一、三五	一〇	一、一三	七	一、一一	九	一、一〇
婦人	八	〇、〇三	一八	〇、〇八	一一	〇、〇九	五	〇、〇六	七	〇、一一	五	〇、〇六
全聽講生數	二七七		二〇八		一二五		七八		六六		八〇	

年度	學期	聽講生數	百分率	聽講生數	百分率	聽講生數	百分率
第三年（大正八年）	官公吏	五	〇・〇七	四	〇・〇八	三	〇・〇六
	教員	八	〇・一二	七	〇・一五	九	〇・一八
	學生	八	〇・一二	七	〇・一五	四	〇・〇八
	商工業者	一〇	〇・一五	九	〇・一九	九	〇・一八
	會社店員	一九	〇・二九	一〇	〇・二〇	九	〇・一八
	庶無職（不明ナルモノ含ム）	五	〇・〇七	三	〇・〇六	八	〇・一六
	婦人	七	〇・一一	七	〇・一五	二	〇・〇四
	全聽講生數	三	〇・〇五	一	〇・〇二	六	〇・一二
		六〇		四八		五〇	
第四年（大正九年）	官公吏	五	〇・一〇	五	〇・一〇	四	〇・〇八
	教員	八	〇・一六	八	〇・一六	九	〇・一八
	學生	五	〇・一〇	五	〇・一〇	七	〇・一四
	商工業者	一二	〇・二三	一〇	〇・二〇	一三	〇・二六
	會社店員	八	〇・一六	一三	〇・二六	二〇	〇・二七
	庶無職（不明ナルモノ含ム）	四	〇・〇八	三	〇・〇五	四	〇・〇五
	婦人	七	〇・一四	九	〇・一八	一二	〇・一六
	全聽講生數	一	〇・〇二	二	〇・〇三	六	〇・〇八
		四九		五三		七四	

年度	學期	聽講生數	百分率	聽講生數	百分率	聽講生數	百分率
第五年（大正十年）	官公吏	五	〇・〇六	三	〇・〇五	三	〇・〇五
	教員	一〇	〇・一三	八	〇・一四	七	〇・一三
	學生	九	〇・一二	六	〇・一二	二	〇・〇四
第六年（大正十一年）	官公吏	三	〇・〇七	三	〇・〇七		
	教員	六	〇・一四	六	〇・一五	九	〇・一六
	學生	一	〇・〇二			七	〇・一三

年度	學期		官公吏	教員	學生	商工業者	會社店員	庶無職（不明ナ含ム）	婦人	全聽講生數
第七年（大正十二年）	一期	聽講生數	三	一〇		一〇	一〇	四	四	
		百分率	一〇・〇七	一・〇三		一・〇三	一・〇三	一〇・〇九	一〇・〇九	四五・〇九
	二期	聽講生數	五	一四	一	一〇	一六	五	五	
		百分率	一・〇八	一・〇三	一・〇一	一・〇六	一・〇六	一・〇八	一・〇八	六一・〇八
	三期	聽講生數	五	九		九	一五	五	六	
		百分率	一・〇九	一・〇七		一・〇七	一・〇九	一・〇九	一・〇六	五二・〇六
第八年（大正十三年）	一期	聽講生數	四	四	一	三	一四	三	五	
		百分率	一・〇八	一・〇八	一・〇三	一・〇四	一・〇九	一・〇六	一・〇八	四七・一〇
	二期	聽講生數	四	四		二	一三	四	四	
		百分率	一・〇九	一・〇九		一・〇四	一・〇八	一・〇九	一・〇九	四五・〇九
	三期	聽講生數	三	五	二	四	一三	七	五	
		百分率	一・〇六	一・一〇	一・〇四	一・〇八	一・一四	一・一四	一・一〇	五〇・一〇

年度	學期		商工業者	會社店員	庶無職（不明ナ含ム）	婦人	全聽講生數
第七年（大正十二年）	一期	聽講生數	三	一六	五	七	
		百分率	一・一五	一・一二	一・〇七	一・〇九	七六・〇九
	二期	聽講生數	一〇	一三	四	六	
		百分率	一・一八	一・一二	一・〇七	一・一二	五五・一二
	三期	聽講生數	九	一八	三	六	
		百分率	一・一七	一・三四	一・〇五	一・一二	五三・一二
第八年（大正十三年）	一期	聽講生數	三	八	三	七	
		百分率	一・一八	一・一八	一・〇五	一・一六	四三・一六
	二期	聽講生數	九	一〇	六	四	
		百分率	一・一三	一・一四	一・一五	一・〇九	四一・〇九
	三期	聽講生數	八	一七	七	二	
		百分率	一・一四	一・三〇	一・一三	一・〇三	五五・〇三

四、定日講義聽講生地方別統計表

年度	第九年（大正十四年）						第十年（大正十五年）					
學期	一期		二期		三期		一期		二期		三期	
	聽講生數	百分率	聽講生數	百分率	聽講生數	百分率	聽講生數	百分率	聽講生數	百分率	聽講生數	百分率
官公吏	七	〇、〇八	三	〇、〇四	一	〇、〇二	三	〇、〇三	一	〇、〇二		
教員	一〇	一、一二	九	一、一三	一二	一、一四	八	二、〇〇	三	一、一五		
學生	七	〇、〇八	七	〇、〇九	七	〇、〇九	一六	一、一八	一〇	一、一三		
商工業者	一七	一、一九	一六	一、一三	一八	一、一三	一九	二、一一	二〇	二、二五		
會社店員	二四	二、二六	一四	一、一九	一五	二、〇〇	一四	一、一六	一七	二、二		
庶無職（不明ナ含ム）	一三	一、一四	五	〇、〇六	六	〇、〇八	五	〇、〇五	三	〇、〇三		
婦人	七	〇、〇八	五	〇、〇六	八	一、一二	九	一、一〇	八	一、一〇		
全聽講生數	六	〇、〇七	一三	一、一八	一〇	一、一三	六	〇、〇六	八	一、一〇		
	九一		七二		七六		〇		七九			

年度	第一年（大正六年）						第二年（大正七年）					
學期	一期		二期		三期		一期		二期		三期	
	聽講生數	百分率	聽講生數	百分率	聽講生數	百分率	聽講生數	百分率	聽講生數	百分率	聽講生數	百分率

年度	學期		東區	西區	南區	北區	府下	兵庫縣	其他	全聽講生數
第三年（大正八年）	一期	聽講生數	二三	七	九	一四	一七	二		
		百分率	一三·四	一二·一	一四·一	一三·三	一七·一	〇·三		六五
	二期	聽講生數	一五	六	六	一〇	一〇	一		
		百分率	一一·三	一三·三	一三·一	一二·二	一二·一	〇·二		四八
	三期	聽講生數	一七	六	八	一〇	一〇	二		
		百分率	一三·三	一三·三	一五·一	一九·一	一九·一	〇·四		五三
第四年（大正九年）	一期	聽講生數	一七	四	五	一三	七	三		
		百分率	一三·四	一〇·八	一〇·一	二六·一	一四·一	〇·六		四九
	二期	聽講生數	一五	三	七	一六	一〇	二		
		百分率	一八·二	一〇·五	一三·一	三〇·一	一八·一	〇·四		五三
	三期	聽講生數	一九	二	一六	一六	一七	四		
		百分率	二七·一	一〇·三	二二·一	二二·一	二三·一	〇·五		七四
東區	西區	南區	北區	府下	兵庫縣	其他	全聽講生數			
八八	三四	二九	五六	四四	一六					
三·三	一二·一	一四·一	二〇·一	一六·一	〇六·一		二七七			
六八	二三	三二	四〇	三二	一四					
三·三	一·一	一五·一	一九·一	一五·一	〇七·一		二〇八			
四〇	一三	一四	二三	一九	六					
二五·一	一·一	一三·一	二〇·一	一七·一	〇五·一		一一五			
二五	七	九	一七	一四	六					
三·二	〇九·一	一三·一	二二·一	一八·一	〇八·一		七八			
二四	六	六	一三	三	五					
三六·一	〇九·一	〇九·一	二〇·一	一八·一	〇八·一		六六			
三	五	二	一六	二	六					
二六·一	〇六·一	一五·一	二〇·一	二二·一	〇八·一		八〇			

年度	學期	聽講生數	百分率	聽講生數	百分率	聽講生數	百分率
第五年（大正十年）	東區	一六	一三	一九	一四		
	西區	八	一一	二	〇四	四	一〇八
	南區	一五	一九	一一	一三	一〇	一九
	北區	一五	一九	一三	一二	一四	二六
	府下	二	二六	一〇	一八	一〇	一九
	兵庫縣	一	〇二	一	〇三	一	〇二
	其他						
	全聽講生數	七六		五五		五三	
第七年（大正十二年）	學期	一期		二期		三期	
	東區	一五	一三	一六	一六	一八	一三
	西區	八	一一	一〇	一六	六	一二
	南區	七	一七	九	一五	八	一五
	北區	七	一五	一一	一八	三	一三
第六年（大正十一年）	學期	一期		二期		三期	
	東區	一三	一八	一五	一七	一二	一三
	西區	五	一三	七	一七	七	一三
	南區	九	一一	八	二〇	九	一六
	北區	九	一一	五	一三	一二	二〇
	府下	六	一四	五	一二	一三	二四
	兵庫縣	二	〇五	一	〇二	三	〇五
	其他						
	全聽講生數	四三		四一		五五	
第八年（大正十三年）	學期	一期		二期		三期	
	東區	一五	一三	一七	一三	一五	一三〇
	西區	七	一二	四	〇九	四	〇八
	南區	七	一五	六	一三	七	一四
	北區	九	一九	六	一三	七	一四

年度	學期		府下	兵庫縣	其他	全聽講生數	東區	西區	南區	北區	此花區	港區	浪速區	天王寺區	住吉區	東成區	西成區
第九年（大正十四年）	一期	聽講生數	一〇				一八	一五	一〇	一五							
		百分率	一三			四五	二〇	一六	一二	一六							
	二期	聽講生數	一三	二			一八	五	五	六	一	三	一	四	六	二	
		百分率	二一	〇三		六一	二五	〇七	〇七	〇八	〇一	〇四	〇二	〇六	〇八	〇三	
	三期	聽講生數	七	一			一九	七	五	七	三	三	一	五	六	一	
		百分率	一五	〇二		五二	二五	〇九	〇七	〇九	〇四	〇四	〇二	〇七	〇八	〇二	
第十年（大正十五年）	一期	聽講生數	九				一九	六	六	五	三	六	一	八	九	六	
		百分率	一九			四七	二二	〇七	〇七	〇六	〇三	〇七	〇二	〇九	一〇	〇七	
	二期	聽講生數	三				二六	五	一〇	三	三	三		五	五	一	
		百分率	一七			四五	三三	〇六	一三	〇四	〇四	〇四		〇六	〇六	〇二	
	三期	聽講生數	一四	三													
		百分率	一八	〇六		五〇											

東淀川區	一	二	二	一	一	
西淀川區		二	二			
府下	三	一三	一三	一四	一三	
兵庫縣	二	五	二	二	一	
其他				一		
全聽講生數	九二	七二	七六	九〇	七九	
	一〇三	一〇二	一〇三	一〇一	一〇五	
	一三三	一一八	一一七	一一六	一一六	
	一〇二	一〇三	一〇三	一〇一	一〇一	

五、日曜朝講聽講者數統計表

學期	每回平均聽講者數	全聽講者數
第一年 第一期		
第一年 第二期		
第一年 第三期	四五	五四四
第二年 第一期	二三	一五八
第二年 第二期	二五	三七七
第二年 第三期	一九	二四二

學期	每年平均聽講者數	全聽講者數
第五年 第一期		
第五年 第二期	二九	二八七
第五年 第三期	一八	一七六
第六年 第一期	二	二三三
第六年 第二期	一八	二八八
第六年 第三期	一七	二一九

六、文科講義聽講生出席數統計表

學期	全聽講生數	每回平均出席數	出席百分率	出席延人員
第一年第一期	六五	三〇	四七、	三六六
第一年第二期	三一	三三	四二、	一七三
第二年第一期	一六	一〇	六二、	一〇七
第二年第二期	一六	九	五六、	一〇三
第二年第三期	三〇	一七	五六、	二三三
第三年第一期	二〇	三三	二六六	二六六
第三年第二期	二二	三三九	三二九	三二九
第三年第三期	二五	四〇〇	二六四	二六四
第四年第一期	一九	一八六	一七	一七九
第四年第二期	二五	三四六	一七	二七〇
第四年第三期	二六	三六三		六、〇〇五
第七年第一期	三	二六六		
第七年第二期	三	三二九		
第七年第三期	八	二六四		
第八年第一期	一七	一七九		
第八年第二期	一七	二七〇		
總計		六、〇〇五		

年度	學期	聽講生數	百分率
第三年（大正十四年）	第一期	三三	一、四〇
	第二期	一六	九、五六
	第三期	一八	一、五〇
第四年（大正十五年）	第一期	二三	一、三〇
	第二期	二四	一、五五
總計		一四八	一、六一六

七、文科講義聽講生職業別統計表

年度	學期	第一年（大正十二年）						第二年（大正十三年）					
		一期		二期		三期		一期		二期		三期	
	聽講生數	百分率	聽講生數	百分率	聽講生數	百分率	聽講生數	百分率	聽講生數	百分率	聽講生數	百分率
官公吏			五	〇、八	二	〇、六			一	〇、六	一	〇、三
教員			一八	二、八	九	一、九	五	三、三	三	一、九	五	一、七
學生			四	〇、六	一	〇、三						

年度	學期		官公吏	教員	學生	商工業者	會社店員	庶無職（不明ナ含ム）	婦人	全聽講生數
第三年（大正十四年）	一期	聽講生數		九		八	二	一	一	二
		百分率		二八		二五	三四	〇三	〇三	〇六	三
	二期	聽講生數		四	一	四	五		一	一	
		百分率		二五	〇六	二五	三		〇六	〇六	一六
	三期	聽講生數		四	一	一	五	一	一	一	
		百分率		二三	〇五	二八	二八	〇五	〇五	〇五	一八
第四年（大正十五年）	一期	聽講生數		三	三	五	七	一	三	一	
		百分率		一三	一三	二三	三〇	〇四	一三	〇四	二三
	二期	聽講生數		五	三	三	九		三	一	
		百分率		二二	一三	一三	二七		一三	〇四	二四
	三期	聽講生數									
		百分率									

年度	學期		商工業者	會社店員	庶無職（不明ナ含ム）	婦人	全聽講生數
第三年（大正十四年）	一期	聽講生數					
		百分率					
	二期	聽講生數	七	一六	八		七
		百分率	一二	二五	一三		一二	六五
	三期	聽講生數	四	八	二	三	二
		百分率	一三	二六	〇六	〇九	〇六	三
第四年（大正十五年）	一期	聽講生數	二	七			二
		百分率	一三	一四			一三	一六
	二期	聽講生數	六	五			一
		百分率	一八	三二			〇六	一六
	三期	聽講生數	六	二	一	三	二
		百分率	一〇	三七	〇三	一〇	〇六	三〇

八、文科講義聽講生地方別統計表

年度	第一年（大正十二年）				第二年（大正十三年）			
學期	一期	二期	三期		一期	二期	三期	
	聽講生數	百分率	聽講生數	百分率	聽講生數	百分率	聽講生數	百分率
東區			六	一九	四	一五	六	二〇
西區	二	一六	六	一九	一	〇六	二	一三
南區	二	一八	六	一九	四	二五	四	二五
北區	一〇	一五	六	一九	二	一三	一	〇六
府下	一五	二三	六	一九	五	二一	三	一八
兵庫縣	四	〇六	一	〇三			三	一〇
其他								
全聽講生數	六五		三		一六		一六	三〇

年度	第三年（大正十四年）				第四年（大正十五年）			
學期	一期	二期	三期		一期	二期	三期	
	聽講生數	百分率	聽講生數	百分率	聽聽生數	百分率	聽講生數	百分率
東區	六	一九	三	五	三	八	四	七
西區	六	一九	三	二	三	二四	四	二九

九、定期講演聽講者數並職業別統計表

區	南區	北區	此花區	港區	浪速區	天王寺區	住吉區	東成區	西成區	東淀川區	西淀川區	府下	兵庫縣	其他	全聽講生數
	四	四										三			
	二、二	二、二										三、七			三一
	一	一	一				一					四			
	〇、六	〇、六	〇、六				〇、六					二、五			一六
	二	一	一				一			一	一	三			
	一、二	〇、五	〇、五				〇、五			〇、五	〇、五	一、七			八
	二	一	一			一	一		一			三	二		
	〇、九	〇、四	〇、四			〇、四	〇、四		〇、四			一、三	〇、九		三
	二	一	一			三	一					三	一	一	
	〇、八	〇、四	〇、四			一、二	〇、四					一、二	〇、四	〇、四	二四

回數	一——一〇 聽講者數	百分率	一一——二〇 聽講者數	百分率	二一——三〇 聽講者數	百分率	三一——四〇 聽講者數	百分率
官公吏	一三八	〇七	六一	〇七	六四	〇五	七七	〇七
教員	三五一	一八	一六四	一八	一七七	一五	二〇八	一八
學生	一八五	一〇	一二四	一三	一五九	一三	一九六	一七
商工業者	四三〇	二三	二四三	二六	三〇三	二五	二六〇	二三
會社店員	三二七	一七	一五七	一七	二六二	二二	二四四	二二
庶無職（不明ナ含ム）	一四五	〇八	六七	〇七	六二	〇五	七四	〇六
婦人	二八四	一五	九一	一〇	一六〇	一三	一五	一〇
全聽講者數	七三	〇四	三四	〇四	四	〇〇三	八	〇一
	一九三三		九三一		一一九一		一八二	

回數	四一——五〇 聽講者數	百分率	五一——六〇 聽講者數	百分率	六一——七〇 聽講者數	百分率	七一——八〇 聽講者數	百分率
官公吏	四四	〇六	六四	〇五	七〇	〇八	七〇	〇八
教員	一五四	一三	二六四	一三	一六四	一八	一六四	一八
學生	一三〇	一八	二一〇	一八	一五五	一七	一五五	一七
商工業者	一四二	二〇	二一〇	一八	一八〇	二〇	一八〇	二〇
會社店員	一四七	二一	二四一	二〇	二三〇	二五	二三〇	二五

回數	聽講者數	百分率	官公吏	教員	學生	商工業者	會社店員	庶民	無職（不明ナ含ム）人	婦人	全聽講者數
八一——九〇	一二二——一三〇	五四	〇·七	七六	一〇二	二二五	二二四	二四六	三四	九一	二七
				〇·八	一·二	一·四	二·四	二·七	〇·四	一·〇	〇·三
九一——一〇〇	一三一——一四〇	三六	〇·六	四九	五二	一〇七	一四九	三三五	二九	一三七	三四
				〇·五	〇·六	一·三	一·七	三·八	〇·三	一·五	〇·四
一〇一——一一〇	一四一——一五〇	三二	〇·五	三三	四七	九五	一〇八	二一八	一三	一·〇	二三
				〇·四	〇·七	一·五	一·七	三·四	〇·二	一·七	〇·四
一一一——一二〇	一五一——一六〇	一五	〇·三	四七	五〇	七九	一三〇	二四六	三二	七一	二三
				〇·七	〇·七	一·三	一·九	三·六	〇·五	一·〇	〇·三

庶民	無職（不明ナ含ム）人	婦人	全聽講者數
二九	六〇	三	
〇·四	〇·八	〇·〇四	七〇九
五八	一二四	二七	
〇·五	一·〇	〇·二	一九八
三五	七一	一	
〇·四	〇·八	〇·一	九一六
三五	七一	一	
〇·四	〇·八	〇·二	一〇三

回數	一八一—一七〇 聽講者數	百分率	一七一—一八〇 聽講者數	百分率	一八一—一九〇 聽講者數	百分率	一九一—二〇〇 聽講者數	百分率
官公吏	一八	〇·〇三	二七	〇·〇五	三〇	〇·〇七	五〇	〇·〇六
教員	一六五	二·〇四	九三	一·〇八	六九	一·〇五	一二	一·〇三
學生	二八	〇·〇四	二六	〇·〇五	一三	〇·〇三	六四	〇·〇八
商工業者	九〇	一·三	五八	一·一	八九	一·九	一三一	一·七
會社店員	二〇三	三·〇	一四九	二·八	一〇〇	二·四	一九五	二·五
庶無職（不明ナ含ム）	四〇	〇·六	四〇	〇·八	二八	〇·六	三〇	〇·四
婦人	一〇五	一·五	一三	一·三	九七	二·一	一八四	二·三
全聽講者數	三七	〇·五	一九	〇·四	三	〇·五	二四	〇·三
	六八六		五二五		四九八		七八九	

回數	一八一—一七〇 聽講者數	百分率	一七一—一八〇 聽講者數	百分率	一八一—一九〇 聽講者數	百分率	一九一—二〇〇 聽講者數	百分率
教員	六九	〇·〇九	三七	〇·〇六	二九	〇·〇四	三	〇·〇六
學生	九九	一·一四	八二	一·三	七二	一·一	三八	〇·七
商工業者	一三一	一·八	一三四	一·九	一七八	二·六	一〇一	二·〇
會社店員	二六八	三·六	二四四	三·八	二三四	三·三	二〇〇	三·九
庶無職（不明ナ含ム）	二五	〇·三	二五	〇·四	五六	〇·八	三三	〇·六
婦人	六九	〇·九	七二	一·一	六二	〇·九	七四	一·五
全聽講者數	一八	〇·〇三	二四	〇·〇四	二	〇·〇三	一七	〇·〇三
	七三三		六四三		六七三		五一〇	

回數	二〇一—二一〇		二一一—二二〇		二二一—二三〇		二三一—二四〇	
	聽講者數	百分率	聽講者數	百分率	聽講者數	百分率	聽講者數	百分率
官公吏	五一	〇・〇九	四二	〇・〇八	五六	〇・〇九	四〇	〇・〇八
教員	九三	一・一六	五四	一・一	七〇	一・一二	五二	一・〇
學生	三〇	〇・〇五	四二	〇・〇八	四三	〇・〇七	二六	〇・〇三
商工業者	一四〇	一・一三	九六	一・一九	一一七	一・一九	一〇二	一・一〇
會社店員	一二五	一・一九	九五	一・一八	九七	一・一六	七五	一・一四
庶民	三三	〇・〇四	二七	〇・〇五	三八	〇・〇六	二五	〇・〇五
無職（下明ナ人ヲ含ム）	一三二	一・一三	一五三	一・三〇	一七九	二・二九	一九一	三・一七
婦人	一五	〇・〇三	五	〇・〇一	一〇	〇・〇二	一七	〇・〇三
全聽講者數	五九七		五一四		六一〇		五一八	

回數	二四一—二五〇		二五一—二六〇		二六一—二七〇		二七一—二八〇	
	聽講者數	百分率	聽講者數	百分率	聽講者數	百分率	聽講者數	百分率
官公吏	六八	〇・〇九	三五	〇・〇六	二八	〇・〇五	一九	〇・〇五
教員	一〇二	一・一四	六六	一・一〇	四四	〇・〇八	三〇	〇・〇八
學生	三二	〇・〇四	四八	〇・〇八	四六	〇・〇九	二八	〇・〇七
商工業者	一二	一・一六	一〇二	一・一六	六六	一・一三	五六	一・一四
會社店員	三	一・六	三七	一・三	九	一・五	六八	一・七

回數	二八一——二九〇 聽講者數	二八一——二九〇 百分率	二九一——二九八 聽講者數	二九一——二九八 百分率	總計
官公吏	一八	〇・五	一八	〇・五	
教員	三三	〇・八	三九	一・一	
學生	三三	〇・八	二〇	〇・六	
商工業者	五一	一・三	四〇	一・二	
會社店員	六九	一・八	五〇	一・四	
庶民	二六	〇・七	二〇	〇・六	
無職（不明ナ者ヲ含ム）	一五九	四・一	一七九	五・一	
婦人	一	〇・〇二	一・三	〇・〇二	
全聽講者數	三八九		三五一		二二、四九四

庶民	七三	一・〇	四六	一・〇七	三	〇・〇六	三	〇・〇六
無職（不明ナ者ヲ含ム）	二〇七	二・八	一八一	二・九	二四	四・二	一六六	四・三
婦人	一七	〇・二	二〇	〇・三	四	〇・一		
全聽講者數	七四〇		六三四		五一二		三八九	

回數	一——一〇 聽講者數	百分率	一一——二〇 聽講者數	百分率	二一——三〇 聽講者數	百分率	三一——四〇 聽講者數	百分率	四一——五〇 聽講者數	百分率	五一——六〇 聽講者數	百分率
東區	七四〇	一、三九	三二五	一、三五	三七七	一、三一	三三四	一、二八	一四七	一、三五	四二七	一、三七
西區	二〇三	一、一一	八二	〇、九	一四七	一、三	一三九	一、一三	一〇八	一、一五	一五六	一、一三
南區	二七三	一、一四	一七一	一、一八	二〇六	一、一七	一九二	一、一六	一一六	一、一六	一九八	一、一七
北區	三四八	一、一八	二〇四	一、三三	二七二	一、三三	二九七	一、二五	一二三	一、一七	一八三	一、一六
府下	二九一	一、一五	九三	一、一〇	一三一	一、一一	一五五	一、一三	八五	一、一二	一六三	一、一四
他府縣	六二	〇、〇三	五六	〇、〇六	五四	〇、〇五	六五	〇、〇五	三〇	〇、〇四	四九	〇、〇四
全數	一、九一七		九三一		一、一八七		一、一八二		七〇九		一、一八六	
不明	一六				四						二	

回數	六一——七〇 聽講者數	百分率	七一——八〇 聽講者數	百分率	八一——九〇 聽講者數	百分率	九一——一〇〇 聽講者數	百分率	一〇一——一一〇 聽講者數	百分率
東區	二七八	一、三〇	二六八	一、二六	二六二	一、二八	二七六	一、三〇	二五二	一、三九
西區	一二七	一、一四	一五一	一、一五	一四一	一、一五	一三三	一、一〇	九一	一、一四
南區	一五二	一、一七	一〇三	一、一〇	一六七	一、一八	一五八	一、一八	一〇三	一、一七
北區	一四四	一、一六	一七一	一、一七	一四一	一、一五	一五九	一、一八	一〇三	一、一六
府下	一八八	一、一一	二〇三	一、一〇	一八〇	一、一九	一四七	一、一六	七三	一、一一
兵庫縣	二〇	〇、〇二	一五	〇、〇一	二〇	〇、〇二	二五	〇、〇三	二	〇、〇二
其他	九	〇、〇一	二	〇、〇一	一四	〇、〇二	五	〇、〇一	七	〇、〇一
全數		九一六		一、〇二二		九二五		八九二		六四七

回數		一一一—一二〇	一二一—一三〇	一三一—一四〇	一四一—一五〇	一五一—一六〇
東區	聽講者數	二三二	二八九	二四六	二九一	二四二
	百分率	〇·三四	〇·三九	〇·三八	〇·四三	〇·四七
西區	聽講者數	八八	八六	八七	一〇七	六二
	百分率	〇·一三	〇·一二	〇·一四	〇·一六	〇·一三
南區	聽講者數	一二二	一二六	一〇七	九一	八〇
	百分率	〇·一八	〇·一七	〇·一七	〇·一四	〇·一六
北區	聽講者數	一二三	一二三	一〇〇	九二	五五
	百分率	〇·一八	〇·一七	〇·一七	〇·一四	〇·一二
府下	聽講者數	八五	八五	六七	七三	五九
	百分率	〇·一二	〇·一二	〇·一〇	〇·一二	〇·一二
兵庫縣	聽講者數	二一	一八	一九	九	八
	百分率	〇·〇三	〇·〇二	〇·〇三	〇·〇一	〇·〇二
其他	聽講者數	七	六	七	一〇	四
	百分率	〇·〇一	〇·〇一	〇·〇一	〇·〇一	〇·〇一
全數		六七七	七三三	六四三	六七三	五一〇

回數		一六一—一七〇	一七一—一八〇	一八一—一九〇	一九一—二〇〇	二〇一—二一〇
東區	聽講者數	二五四	一九二	一七二	二八二	一八〇
	百分率	〇·三七	〇·三七	〇·三七	〇·三六	〇·三〇
西區	聽講者數	一二	八二	四八	九九	八三
	百分率	〇·一六	〇·一六	〇·一一	〇·一三	〇·一四
南區	聽講者數	三〇	八二	七七	一五三	一一九
	百分率	〇·一九	〇·一六	〇·一七	〇·一九	〇·二〇
北區	聽講者數	六七	五七	六六	七六	七四
	百分率	〇·一〇	〇·一〇	〇·一五	〇·一〇	〇·一三

回數	二二一—二三〇 聽講者數	二二一—二三〇 百分率	二三一—二四〇 聽講者數	二三一—二四〇 百分率	二四一—二五〇 聽講者數	二四一—二五〇 百分率	全數
東區	一六七	〇三三	一七〇	〇二八	一三五	〇二六	五一四
西區	六八	〇一三	九八	〇一六	七九	〇一五	六一〇
南區	九六	〇一九	一一〇	〇一八	一〇七	〇二一	五一八
北區	五九	〇一一	五五	〇〇九	六四	〇一三	七四〇
府下	一一三	〇二二	一三七	〇二一	九五	〇一八	
兵庫縣	二二	〇〇四	三六	〇〇六	三三	〇〇六	
其他	三	〇〇一	四	〇〇一	六	〇〇一	

回數	二二一—二三〇 聽講者數	二二一—二三〇 百分率	二三一—二四〇 聽講者數	二三一—二四〇 百分率	二四一—二五〇 聽講者數	二四一—二五〇 百分率	全數
府下	九九	〇一四	八九	〇一七	七五	〇一六	六八六
兵庫縣	二〇	〇〇四	三	〇〇四	一八	〇〇四	五一五
其他			一	〇〇二	三	〇〇六	四五八
全數					一五二	〇一九	七八九
					三五	〇〇四	五九七
					一〇〇	〇一七	
					三六	〇一六	
					五	〇〇一	

回數	二五一—二六〇		二六一—二七〇		二七一—二八〇		二八一—二九〇		二九一—二九八	
	聽講者數	百分率	聽講者數	百分率	聽講者數	百分率	聽講者數	百分率	聽講者數	百分率
東區	一五七	〇·二三	一二二	〇·二四	一〇三	〇·二六	八七	〇·二三	八〇	〇·二三
西區	六八	〇·一二	四三	〇·〇八	二五	〇·〇六	三五	〇·〇九	二五	〇·〇七
南區	三二	〇·〇五	三九	〇·〇八	三三	〇·〇八	三四	〇·〇九	三四	一·〇
北區	五〇	〇·〇八	四〇	〇·〇八	二二	〇·〇六	一九	〇·〇五	二六	〇·〇七
此花區	二八	〇·〇四	一五	〇·〇三	一八	〇·〇五	二二	〇·〇六	二二	〇·〇六
港區	二一	〇·〇五	三七	〇·〇七	三三	〇·〇八	三四	〇·〇九	二四	〇·〇七
浪速區	三	〇·〇〇四	一	〇·〇〇二	五	〇·〇一	三	〇·〇一	四	〇·〇一
天王寺區	六五	〇·一一	四九	〇·〇九	二四	〇·〇六	三二	〇·〇八	二五	〇·〇七
住吉區	二四	〇·〇四	三五	〇·〇七	三三	〇·〇八	三三	〇·〇八	一七	〇·〇五
東成區	四二	〇·〇七	三三	〇·〇六	一六	〇·〇四	九	〇·〇二	一四	〇·〇四
西成區	一二	〇·〇二	二	〇·〇二	九	〇·〇二	四	〇·〇一	六	〇·〇二
東淀川區	六	〇·〇一	九	〇·〇二	五	〇·〇一	六	〇·〇二	二	〇·〇一
西淀川區	三二	〇·〇五	一七	〇·〇三	一四	〇·〇四	一八	〇·〇五	一四	〇·〇四
府下	三九	〇·〇六	二三	〇·〇五	二六	〇·〇七	二〇	〇·〇五	二四	〇·〇七
兵庫縣	三八	〇·〇六	三三	〇·〇六	二〇	〇·〇六	三二	〇·〇八	三三	〇·一〇
其他	八	〇·〇一	六	〇·〇一	五	〇·〇一	五	〇·〇一	二	〇·〇一
全數	六三四		五一二		三八九		三八九		三五一	

一一、通俗講演聽講者數表

回數	一—一〇	二一—二〇	三一—三〇	三一—四〇	四一—五〇	五一—六〇	六一—六八	合計	平均一回聽講者數
聽講者數	一、七二〇	八二〇	七五二	六七〇	五二〇	六九七	四八三	五、六七二	八三

一二、定日講義開始以來聽講生全數

聽講ヲ繼續セシ年、學期數	人數	聽講ヲ繼續セシ年、學期數	人數
十年	七	六學期	一一
八年	三	五學期	一六
六年	五	四學期	四六
五年	五	三學期	七〇
四年	六	二學期	一五七
三年	一六	一學期	四九三
八學期	六	合計	八五〇
七學期	九		

備考　右ノ中曾テ文科講義聽講生タリシ者及ビ現在兼修シ居ルモノ合セテ　四二人

一三、文科講義開始以來聽講生全數

聽講ヲ繼續セシ年、學期數	人數	聽講ヲ繼續セシ年、學期數	人數
四年	七	四學期	一
三年	二	三學期	二
七學期	二	二學期	二七
六學期	二	一學期	八八
五學期	三	合計	一三四

備考　右ノ中曾テ定日講義聽講生タリシ者及ビ現在兼修シ居ルモノ合セテ　四人

(八)　懷德堂文庫藏書冊數

懷德堂文庫が現に藏儲せる圖書は、碩園博士記念會より寄贈せられたる碩園記念文庫と、愛甲兼達君の委託に係る故籾山衣洲翁の舊藏書全部、及懷德堂記念會藏書(堂重建後購入書及寄贈書)とより成り、主として漢籍に屬す。因りて今、支那經籍分類の例に遵ひ、經史子集の四部に別ちて、其の冊數を擧ぐ。四部の外に雜とせるは邦人の撰著にして、ただ皇朝諸子の中に列すべきものと、詩文集

とは、四部中に收めたり。

	經		史		子		集		雜		計	
	部	冊	部	冊	部	冊	部	冊	部	冊	部	冊
碩園記念文庫	一二八	二、三四二	二一七	二、六六六	三四一	二、三四五	七五六	六、一八八	二〇一	六二九	一、六四三	四、一三〇
愛甲氏委託書	一六七	一、六二五	一四五	一、一四九	二九六	二、〇四八	二八七	一、八九三	一一九	二八〇	一、〇一四	七、〇九五
懷德堂記念會藏書	一三七	八五一	二五	二五〇	一六九	二、八八〇	二三	五二	四九	二三〇	四〇二	四、一五四
計	四三三	四、八一九	三八七	四、一二五	八〇六	七、一七三	一、〇六五	八、一三三	三六九	一、一二九	三、〇五九	二五、五七九

(九) 三年以上聽講繼續者及素讀修了者

一、定日講義聽講生 (五十音順)

十年繼續者

飯島溜三郎　井上正美　岡田玄碩　小沼量平　坂田廣吉
野口幸雄　平野得三

八年繼續者

太田勘兵衛　田中貞雄　山本檜信

六年繼續者

岩淵賢治　高梨一雄　竹田義一　不破重三　今川せい

五年繼續者

大阪金太　古下秀夫　高田伊三郎　中川幸三　橋詰智三

四年繼續者

青木潤　石井宗一　井上恂　嚴本生次　高砂清七

增地義全

三年繼續者

天野元之助　阿部剛一　岡部和一郎　吾代節雄　大塚鋼予

鍛冶屋間三　河野清光　小松熊之助　酒井金太郎　酒井實

白井久吉　仲田博一　林滿子　三輪時雄　三輪丁維福

吉田清德

二、文科講義聽講生（五十音順）

四年繼續者

今川せい　岡田玄碩　久保田昇　中川幸三　野口幸雄
村上信三　山本檜信

三年繼續者

竹田義一　不破重三

三、素讀修了者（修了順）

小西勝雄　後醍院良正　西村康哉　渡邊十郎　光吉積男
天野元之助　山本又一　稲田朝美　森井康太郎　中尾謙吉
岡田長三郎　京極興作　神納庄一　宇野新逸　京極興四一
佐々木洋士男　今川ふさ　河島正一　佐々木徹造　岩淵正一
宇野要次　伊吹花子　今井猷次

（一〇）財團法人懷德堂記念會役員

理事

永田仁助（理事長）　今井貫一（常任理事）　小倉正恒

上野精一　田中隆三

幹事

成田軍平　岡野廉平

評議員

池原鹿之助　池上四郎　林市藏　中橋德五郎

村山龍平　大久保利武　山口吉郎兵衛　男爵藤田平太郎

男爵鴻池善右衛門　佐多愛彥　廣海二三郎　平瀨三七雄

樋口三郎兵衛　本山彥一　杉村正太郎　廣岡惠三

木間瀨策三　村山長擧　愛甲兼達　中川望

關一　小畑富記　野々村政也　山本理一

勝本忠兵衛　土屋元作

舊役員

理事　水落庄兵衛　廣岡惠三　西村時彦　坂仲輔

幹事　上松寅三　谷川清澄　尾崎保之助

評議員　芝川又右衛門　高谷恒太郎　島村久　土居通夫

横山助成　高見龜　宮島茂次郎　柴直太郎

三邊長治　水落庄兵衛　平賀敏　上野理一

林市藏　黑木吉郎　鈴木馬左也　殿村平右衛門

芦田順三郎　小山健三　今西林三郎　福士末之助

西村時彦　安原舜一　中田錦吉　住友吉左衛門

（一一）財團法人懷德堂記念會財産（大正十五年八月調）

建築費

（備考　經常費使用の現有金は算入せず）

講堂並事務所　一五、七七六、〇七八円
書庫並研究室建造特別指定寄附金　一〇、九二七、〇〇〇

設備費
圖書及器具　六、〇一六、五二七
碩園記念文庫　三三、八六二、七〇〇

基金
懷德堂記念會基金　九六、八三八、〇〇〇
（大正十五年三月末日現在）
奬學基金　五〇、〇〇〇、〇〇〇
合計　二一三、四二〇、三〇五

尙今回竣工せる書庫幷研究室の建築費設備費豫算左の如し。

建築費　二二、三九八、六二〇
設備費　三、七三三、〇〇〇
合計　二六、一三一、六二〇

（一二）懷德堂記念會寄附者諸彦芳名並寄附金額

財團法人懷德堂記念會設立以來茲に十周年を經たり。幸に會の基礎漸次に鞏固を加へ、事業も亦年を逐ふて進展せるを見る。是れ大方諸彦捐資助力の賜といふべし。今左に寄附者諸彦の芳名と金額とを列載して厚く感謝の意を表す。

（五十音順）

七〇〇、〇〇〇円	愛甲兼達	五〇、〇〇〇円	芦田順三郎	一〇〇、〇〇〇円	猪飼史郎
二〇、〇〇〇	池田經三郎	一〇〇、〇〇〇	池原鹿之助	二〇〇、〇〇〇	井上準之助
一〇〇、〇〇〇	今井貫一	五〇〇、〇〇〇	今西林三郎	一、〇〇〇、〇〇〇	岩井勝次郎
一〇〇、〇〇〇	植田政藏	二、二〇〇、〇〇〇	上野精一	一、〇〇〇、〇〇〇	上野理一
二五、〇〇〇	植村俊平	三〇〇、〇〇〇	浮田桂造 浮田忠次郎	三〇〇、〇〇〇	岡橋治助
二、三三五、五〇〇	小倉正恒	一〇、〇〇〇	尾崎保之助	一〇〇、〇〇〇	小野暎太郎
二、〇〇〇、〇〇〇	大阪商船會社	一〇〇、〇〇〇	片岡直輝	四〇〇、〇〇〇	勝本忠兵衛
一〇〇、〇〇〇	葛城彌兵衛	二、〇〇〇、〇〇〇	川崎武之助	一〇、〇〇〇	祇園清次郎
一〇、〇〇〇	木村彦右衛門	一〇〇、〇〇〇	草鹿丁卯次郎	一、五〇〇、〇〇〇	男爵鴻池善右衛門

一三、〇〇〇、〇〇〇	久原房之助	一〇〇、〇〇〇	久保無二雄
二〇、〇〇〇	越野嘉助	一〇〇、〇〇〇	小西勝一
二〇〇、〇〇〇	小山健三	六〇〇、〇〇〇	坂仲輔
二〇、〇〇〇	柴直太郎	三〇〇、〇〇〇	芝川又右衛門
五〇〇、〇〇〇	男爵澁澤榮一	一、〇〇〇、〇〇〇	島德藏
五〇、〇〇〇	末吉勘四郎	一、〇〇〇、〇〇〇	杉村正太郎
一七、〇〇〇、〇〇〇	男爵住友吉左衛門	五〇〇、〇〇〇	第一銀行
一〇〇、〇〇〇	高橋卯之輔	五〇〇、〇〇〇	高田愼藏
一〇〇、〇〇〇	田口謙吉	二〇〇、〇〇〇	田中省三
三〇、〇〇〇	津田勝五郎	一〇〇、〇〇〇	侯爵德川賴倫
三〇〇、〇〇〇	外山修	一〇〇、〇〇〇	豐田宇左衛門
七一、〇〇三、六三〇	永田仁助	五〇〇、〇〇〇	中橋德五郎
二〇〇、〇〇〇	南鄕三郎	一、〇〇〇、〇〇〇	新田長次郎
一、五〇〇、〇〇〇	日本郵船會社	三、〇〇〇、〇〇〇	野村德七
一〇〇、〇〇〇	服部金太郎	四、三〇〇、〇〇〇	原口統太郎
一〇〇、〇〇〇	栗山寛一		
一〇〇、〇〇〇	小林左太郎		
二〇、〇〇〇	阪野兼通		
一〇〇、〇〇〇	芝田大吉		
一〇〇、〇〇〇	白井唯一		
三五、〇〇〇	鈴木馬左也		
三〇〇、〇〇〇	第一銀行大阪支店		
一〇〇、〇〇〇	宅德平		
一、〇〇〇、〇〇〇	辻川治助		
三〇〇、〇〇〇	殿村平右衛門		
一〇〇、〇〇〇	中田錦吉		
一〇〇、〇〇〇	中村健次郎		
五〇〇、〇〇〇	西村時彦		
一〇〇、〇〇〇	野々村政也		
五〇、〇〇〇	原田二郎		

一、〇〇〇、〇〇〇　原田十次郎
二〇、〇〇〇　平泉平右衛門
五〇〇、〇〇〇　廣海二三郎
三、〇〇〇、〇〇〇　男爵藤田平太郎　藤田德次郎　藤田彦三郎
二〇、〇〇〇　星野行則
一五、〇〇〇　增田正雄
一〇〇、〇〇〇　松本安正
一、〇〇〇、〇〇〇　三菱合資會社大阪支店
五、五〇〇、〇〇〇　村山龍平
一〇〇、〇〇〇　森平兵衛
二〇〇、〇〇〇　安川敬一郎
一〇〇、〇〇〇　山岡順太郎
一〇〇、〇〇〇　山本源吉

一、〇〇〇、〇〇〇　原田六郎
一〇、〇〇〇　平田讓衛
五〇〇、〇〇〇　廣岡惠三
一二、〇〇〇、〇〇〇　男爵藤田平太郎
二〇〇、〇〇〇　堀啓次郎
一〇、〇〇〇、〇〇〇　松方幸次郎
二〇〇、〇〇〇　水落庄兵衛
三、〇〇〇、〇〇〇　三井合名會社
二〇〇、〇〇〇　村井吉兵衛
五〇〇、〇〇〇　森下博
二三〇、〇〇〇　安川佐次郎
二、五〇〇、〇〇〇　山口吉郎兵衛
一二五、〇〇〇　湯川寛吉

一〇〇、〇〇〇　樋口三郎兵衛
一〇〇、〇〇〇　平瀨三七雄
二〇、〇〇〇　藤澤友吉
一〇〇、〇〇〇　藤野龜之助
一〇〇、〇〇〇　前田榮治郎
二〇〇、〇〇〇　松方正雄
二、〇〇〇、〇〇〇　三菱合資會社
二、〇〇〇、〇〇〇　三井家總代　男爵三井八郎右衛門
一〇〇、〇〇〇　本山彦一
四〇〇、〇〇〇　八木與三郎
一〇、〇〇〇、〇〇〇　安田善次郎
一一〇、〇〇〇　山下芳太郎
二五、〇〇〇　渡邊千代三郎

尙ほ本會の基礎を鞏固にし、事業を永遠に持續せむため、本年が舊懷德堂創學二百周年懷德堂重建

十周年に相當するを機とし、左の趣意書により、基金增募集中なるが、已に寄附を申込まれたる諸賢左の如し。此に附記して以て深厚なる謝意を表す。

三〇、〇〇〇、〇〇〇　男爵　住友吉左衛門
二〇、〇〇〇、〇〇〇　男爵　三井家總代　三井八郎右衛門
二〇、〇〇〇、〇〇〇　男爵　藤田平太郎
三、〇〇〇、〇〇〇　兒玉一造
一〇、〇〇〇、〇〇〇　山口吉郎兵衛
三、〇〇〇、〇〇〇　永田仁助
二〇、〇〇〇、〇〇〇　男爵　鴻池善右衛門
二〇、〇〇〇、〇〇〇　男爵　三菱合資會社社長　岩崎小彌太
三、〇〇〇、〇〇〇　東洋綿花株式會社取締役會長　藤瀨政次郎
三、〇〇〇、〇〇〇　京阪電氣鐵道株式會社社長　太田光熙
三、〇〇〇、〇〇〇　竹中藤右衛門

懷德堂記念會基金增募趣意書

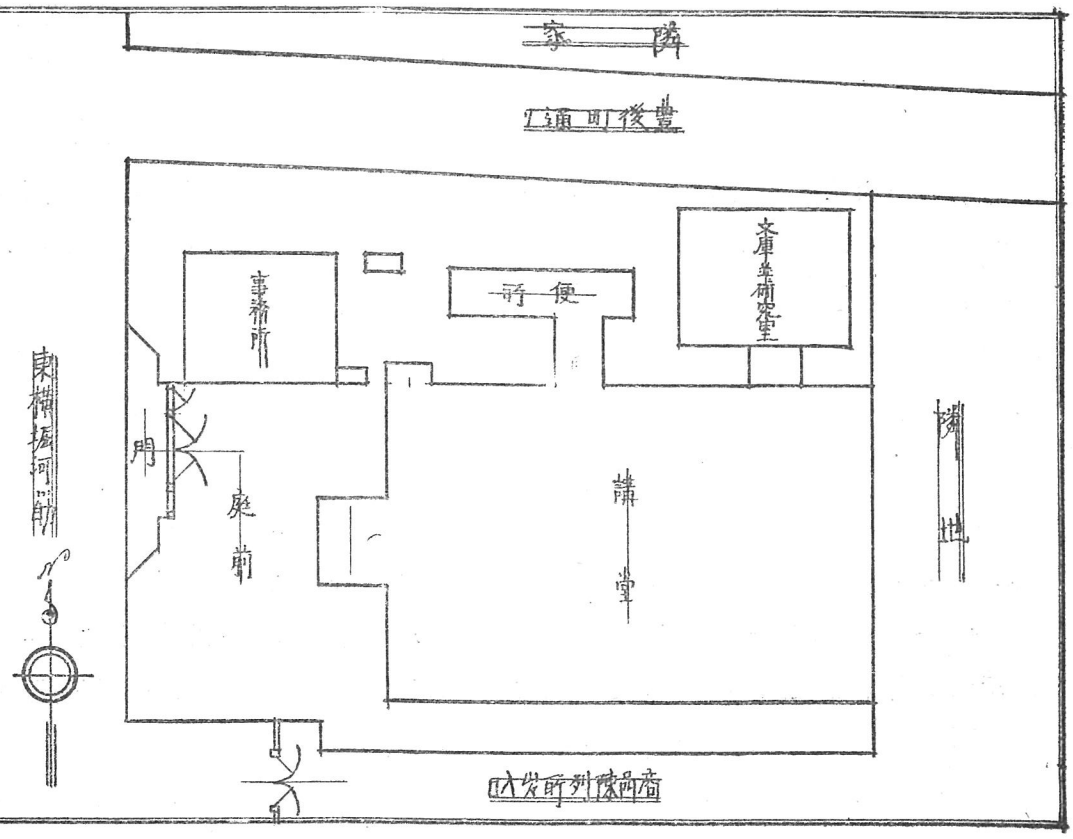
凡ソ社會ノ健全ナル繁榮ト進歩トハ德性ノ涵養ト智識ノ啓發トニ原ヅク懷德堂ガ浪華唯一ノ公學トシテ精神教育ノ機關タルコト百五十年大阪ノ繁榮進歩ニ寄與貢獻セシコトノ大ナル復タ言フヲ須ヒザルナリ曩キニ本會其ノ端ヲ懷德堂ノ功績ヲ顧念シ之ガ先師儒諸先生ヲ追祀スルニ發シ尋イデ財團法人ヲ組織シ大正五年始メテ懷德堂ヲ重建シ講義講演ノ事業ヲ開始セショリ茲ニ十年ヲ閱

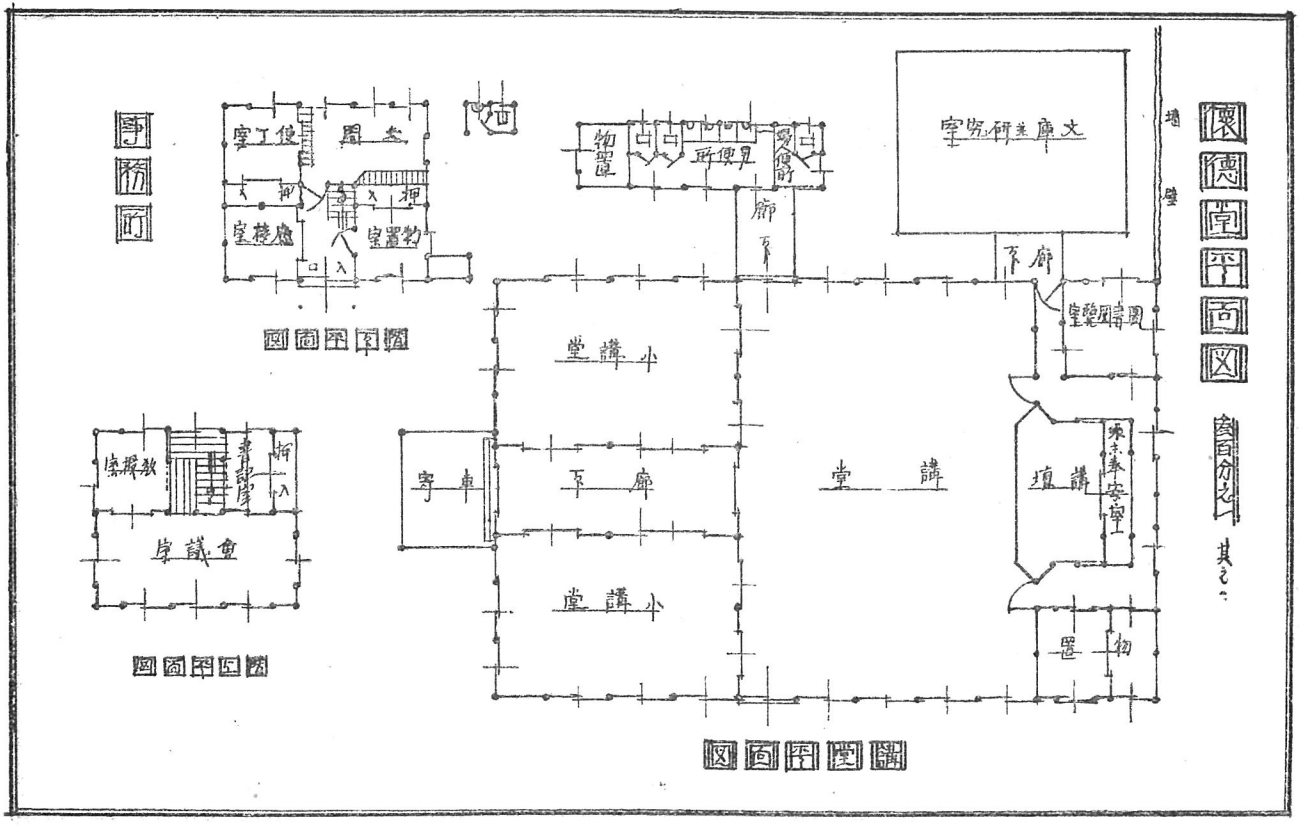
ミシ恰モ本年ハ舊懷德堂ガ幕府ノ允許ヲ得テヨリ滿二百年ニ當レリ抑々本會ノ事業タル德性ノ涵養ト學術ノ研究トヲ目的トシ兼ネテ本邦道德文化ノ淵源タル漢學ノ研究ヲ保護スルニ在リ而シテ其ノ方法タル開放主義ヲ採リ極メテ自由ナル學問修養所タラシメンコトヲ期スザレバ該事業タル期限課程ヲ定メザル永久的成人教育ト稱スベク又一面京都帝國大學擴延ト稱スベキモノタリ本會ノ事業ハ畏クモ　天聽ニ達シ　御下賜金ヲ拜戴スルコト前後兩次ニ及ベリ　聖恩ノ優渥ナル寔ニ感激ニ勝ヘザルトコロナリ誓ツテ微力ヲ效シ萬一ニ報答シタテマツラント欲ス今ヤ幸ニ本會ノ基礎漸ク鞏固ヲ加ヘ其ノ事業亦廣ク世ニ認知セラレントスト雖モ顧ミルニ基金尙ホ未ダ十萬ニ達セズ年々市府ノ補助ト特志者ノ寄附トニ由リテ纔ニ事業ヲ繼續シ得ルノミ因リテ此ノ記念スベキ好時期ニ際シ基金ヲ增募シテ之ガ充實ヲ圖リ本會ノ基礎ヲ磐石ノ堅キニ措キ其ノ事業ヲシテ永遠ニ持續セシメ尙ホ益々之ヲ擴張シ以テ聊カ教化ニ裨補シ學術ノ進步ニ貢獻スルト與ニ大阪ノ繁榮ト進步トノ根柢ヲ養ハント欲ス是レ上ハ海嶽ノ　聖恩ニ報イ奉リ下ハ贊助諸賢ノ高志ニ負カザル所以ノ道ナリト信ズ冀クハ大方諸君子微意ノ存スルトコロヲ諒察セラレ援助ヲ吝マルヽナクンバ仁助等ノ幸之ニ過ギザルナリ

（一三）懷德堂幷文庫平面圖（附建築工事概要）

懷德堂平面図

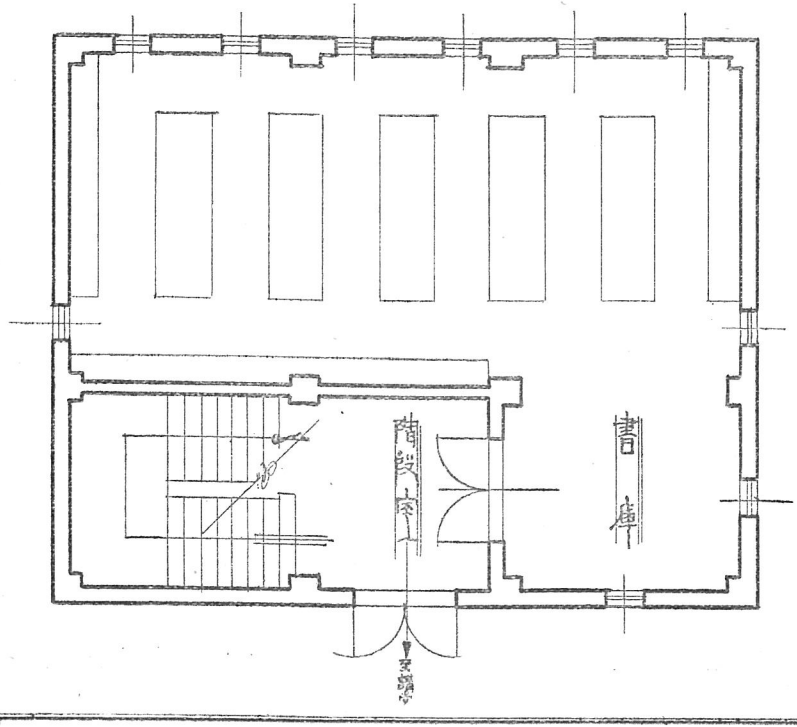
四百分之一　其之一




懷德堂平面図
其之一
事務所
図面平面図
図面平面図
図面平面図
図面平面図
文庫
研究室
物置
便所
廊下
講堂
小講堂
玄関
講堂
壇講
物置
墻壁
教職室
書記室
議室
物置
工作室
廊下
廊下
廊下
玄関
入口
入口
入口
入口

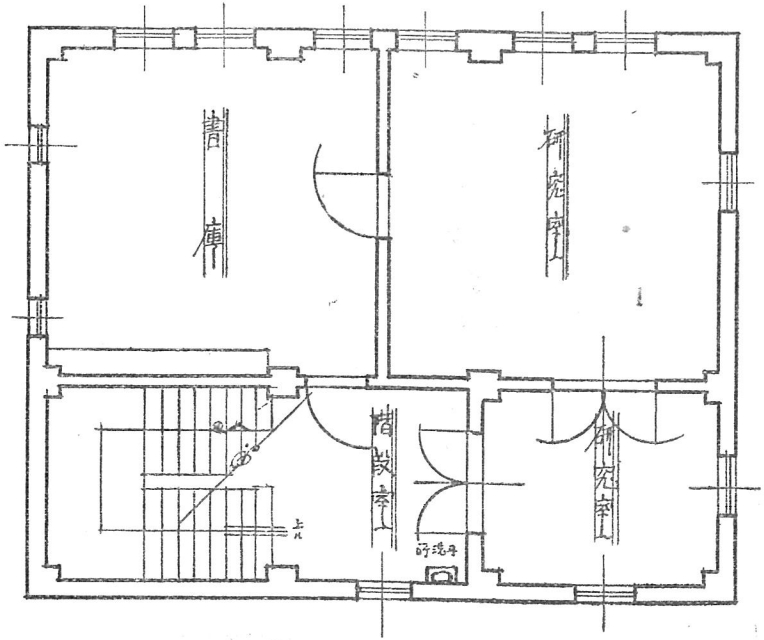
懷德堂文庫

二階平面図



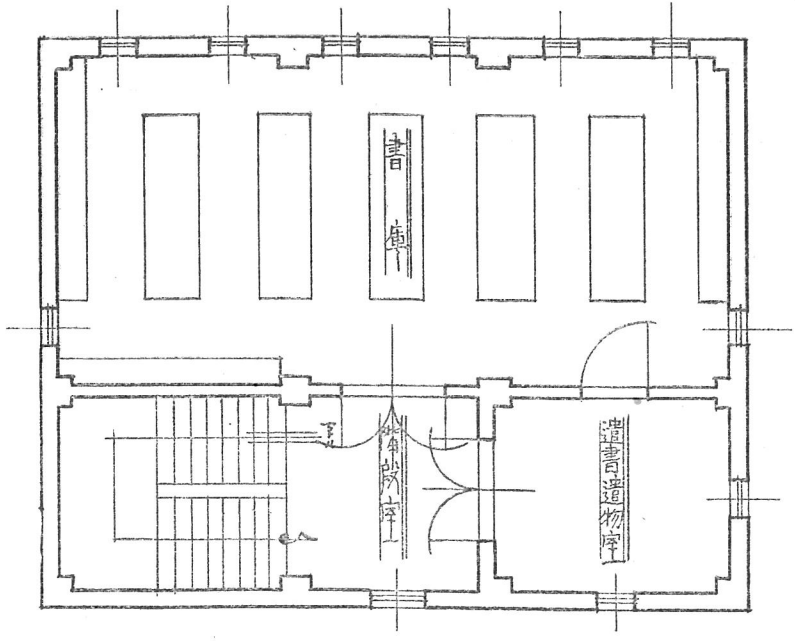
懷德堂文庫

二階平面図



懷德堂文庫

二階平面図



建築工事概要

位置　大阪市東區豐後町五十八番地

敷地面積　三百六十一坪

建物坪數

講堂　百三十四坪一合九勺三二

事務所　十六坪七合二勺

廊下　二坪六合

男女便所物置共　九坪〇六勺六

下便所　五合六勺

伴待　四合四勺一六

此建坪數　百六十三坪五合八勺〇八

書庫（新築）　二十坪

渡廊下（新築）　一坪六合五勺

合計建坪數　百八十五坪二合三勺〇八

講　堂

木造平家建瓦葺外壁は眞壁とす

事務所

木造二階建瓦葺外壁は鰭子下見張とし内壁はすべて眞壁とす

廊下は吹抜屋根瓦葺とす

書　庫（新築）

書庫は鐵筋コンクリート造三階建陸屋根耐震耐火構造とす

建物坪數　二十坪

軒　高　新地盤より軒蛇腹上端迄　三十二尺

建物深さ　新地盤より基礎下迄　五　尺

工事期間　自大正十五年六月一日至同十五年十月三十一日

各階諸室の配置

一階　階段室　書庫

二階　階段室　研究室　書庫

三階　階段室　　遺書遺物室　書庫

構造概梗

主体　鐵筋コンクリート造とし耐震耐火構造とす

屋根　スラブ防水層の上モルタル塗仕上とす

内壁　白漆喰塗仕上とし研究室の一部の壁には壁紙張とす

外壁　總て人造石塗洗出し仕上とす

建具　出入口枠、扉、額縁は總て鐵製使用、研究室の一部は木製巾木使用他は全部モルタル塗仕上、階段周りは人造石研出し仕上とす

窓　外部は鐵扉内部はスチールサッシュ使用總て二重窓とす

床　モルタル塗の上リノリユーム敷とす

階段　は總て鐵骨階段使用

設備工事としては電燈電話電鈴工事、衛生工事とす

渡廊下　木造平家建屋根瓦葺とす

墻壁　鐵筋コンクリート構造とす

附錄

懷德堂堂友會

堂友會は、懷德堂聽講生及び曾て聽講生たりし人々より成れる同志の一團にして、相互の親睦切磋を目的とするものなり。大正十二年六月一部の有志によりて發起せられ、多數の賛同を得、同十一月四日懷德堂恒祭の日に發會式を擧げ、會則を定め、教授を推して會長とし、吉田講師に請ふて主幹を囑し、幹事を定めて會の成立を告ぐ。爾來會則に定むるところの行事を實行して、其の目的を達成すると同時に、會員協力一致して堂の爲めに盡すところ鮮少なりとせず。現在會員九十餘名なり。趣意書幷に會則左の如し。

懷德堂堂友會設立趣旨

懷德堂開講以來茲ニ七年、其ノ間聖賢の教ヲ聽キテ之ヲ喜ブモノ蓋數百人、想フニ吾人ト道ヲ共ニシ樂ヲ同ウスルモノ亦尠少ナラザルベシ。然レドモ每講時ヲ計リテ經筵ニ列シ、講終リテ直チニ解散スルヲ以テ、同人盍簪シテ相語リ胥樂ムノ機會ナキヲ惜ム。是ヲ以テ吾人敢テ自ラ揣ラズ堂友會ヲ起シテ此ノ缺陷ヲ補ヒ、以テ相互ノ親睦ヲ厚ウセント欲ス。同感ノ諸彦奮テ賛翼セラルレバ幸甚

大正十二年六月

發起人

飯島溜三郎　岡田玄碩　中川幸三　井上正美
野口幸雄　太田勘兵衛　山本楢信　小沼量平
小松熊之助　青木潤　坂田廣吉　平野得三

堂友會會則

第一條　本會ヲ堂友會ト稱シ懷德堂聽講生（定日講義、文科講義、定期講演ノ聽講者幷ニ素讀科生ヲモ含ム）幷ニ曾テ聽講生タリシモノヲ以テ組織ス

第二條　本會ハ懷德堂ノ趣旨ニ遵ヒ德性ノ涵養智識ノ向上及ビ堂友ノ親睦ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第三條　本會事務所ヲ懷德堂內ニ設ク

第四條　冬夏二回ノ日ニ於テ茶話會ヲ開キ學術ノ研究討論及ビ相互ノ意見交換ヲナス

第五條　春秋二回適當ノ日ニ於テ探勝會ヲ催ス擔任幹事三名ハ每會之ヲ選擧シ費用ハ參加員ノ負擔トス

第六條　適當ノ年ヲ以テ懷德堂ニ於テ釋奠ヲ行フ

第七條　毎年三回會報ヲ發行シ堂ノ狀況會員ノ寄稿幷ニ會員ノ動靜ヲ掲載ス　但シ必要ニ應ジ臨時增刊スルコトアルベシ

第八條　會員ハ懷德堂恒祭ノ祭事幷ニ用務ヲ助クルモノトス

第九條　會員ハ會費トシテ毎年金壹圓貳拾錢ヲ醵出スルモノトス

第十條　本會ニ會長壹名、主幹壹名、幹事五名ヲ置キ會務一切ヲ處理ス　但幹事ノ任期ハ一ケ年トシ冬ノ茶話會ニ於テ改選ヲ行フモノトス

第十一條　本會ニ名譽會員ヲ置キ懷德堂記念會講師幷ニ理事ヲ推選ス

大正十五年十月十五日印刷

（非賣品）

大阪市東區豐後町

財團法人 懷德堂記念會